

3.まとめ

以上、今回の調査で得た知見を記す。

- ①これまで知られていた遺跡の範囲より、さらに北西側に広がることが確認された。
- ②少量ではあるが弥生時代中期後半の土器が出土していることから、周辺部に同時期の集落の存在が想定される。
- ③自然河川（旧刈藻川）の西側肩部から古墳時代前期（布留式並行期）の土器が多量に出土したこと、またC-8区で同時期の建物が検出されたことなどから調査区の西側高位部に大規模な集落の存在が想定される。
- ④14～15世紀代を中心とした遺構・遺物が多数検出された。同時代の集落の一角であった可能性が高く、その集落の中心は地形から考えて古墳時代前期の集落と同様、調査区西側の高位部に推定される。
- ⑤II-4期（15世紀後半～16世紀初頭）の方形区画溝は、応仁の乱から戦国時代にかけての動乱期にあたることから堀に囲まれた館的なものが想定される。ただし、区画内から館に伴うような遺構が検出されていないのでさらに検討する必要がある。なお、近世の長田神社の神官屋敷地がほぼこの区画を踏襲していることは注目される。
- ⑥調査地は江戸時代中期以降の長田神社神官屋敷地の推定地であったが、それに伴った遺構が検出され、ある程度の復元が可能となった。屋敷地の規模は東・西側が築地堀、南側が木堀で囲まれた（北側については不明）、東西半町、南北半町以上の敷地であったと考えられる。
- ⑦弥生時代～近世にかけての自然流路が検出されたが、これらは旧刈藻川に相当し、時代をおって西から東へと流路が変遷していったことがうかがえる。
- ⑧多量の遺物が出土したが、特に中世後半の遺物については一括のものが多く、今後この地域の基準資料となりうるものである。

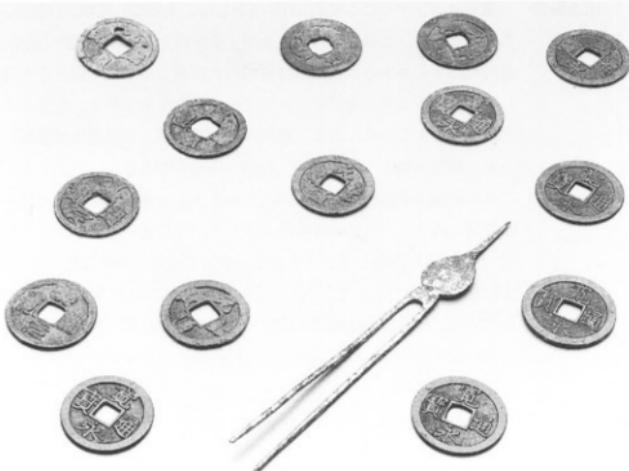


fig.300 出土遺物 かんざしと銭貨

みふね 41. 御船遺跡 第1次調査

1. はじめに

当該地は、神楽遺跡の北側に近接している。神楽遺跡はこれまで9次におよぶ調査が実施され弥生時代の河道、古墳時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物などが検出されているが、当時期の集落の中心は、当該地の南側の神楽町1丁目、2丁目あたりに所在するものと考えられる。

今回この場所に住宅建設が計画され、遺跡の拡がる可能性が考えられたので、試掘調査を実施したところ、敷地東半部で遺物包含層と遺構を確認した。このため再度試掘調査を実施した結果、敷地西半部には遺跡が拡がらないことが確認されたため、東半部で工事により文化財が影響を受ける部分について発掘調査を実施することになった。今回発見された遺跡を御船遺跡と命名した。



2. 調査の概要

基本層序

調査地の基本層序は、第1層現代の盛土、第2層旧耕土、第3層旧床土、第4層灰褐色細砂～中砂、第5層灰茶褐色細砂～中砂、第6層灰褐色細砂である。このうち、第5層が遺物包含層で、第6層上面で遺構を検出した。

検出遺構

第6層上面で、掘立柱建物5棟、井戸4基、土坑5基、ピット多数検出された。土坑は平面形が円形のものと方形のものとがあり、直径1.3～2.5m、深さ70～80cmの円形のものは、井戸の可能性がある。

掘立柱建物 いずれも調査区の北半部で検出されており、それぞれ切り合って検出された。掘立柱建物の南側で検出された数基のピットは、散在的で建物としてはまとまらなかった。掘立柱建物の概要是、表1のとおりである。

遺構名	桁行×梁間	規 模 (柱穴間距離)	柱穴掘形	構造
S B01	3間以上×2間	7.5m以上×4.4m (1.8~2.2m)	直径約40cm、深さ約60cm	総柱
S B02	4間以上×3間	8.5m以上×6.0m (1.6~2.4m)	直径20~40cm、深さ30~60cm	総柱
S B03	2間以上×3間	3.8m以上×6.7m (1.8~2.0m)	直径40cm、深さ50cm	側柱
S B04	3間以上×3間	4.6m以上×6.1m (1.8~2.2m)	直径20~30cm、深さ30~50cm	側柱
S B05	3間×2間以上	5.6m×3.4m以上 (1.8~2.2m)	直径20~40cm、深さ30~50cm	側柱

表1 掘立柱建物の概要

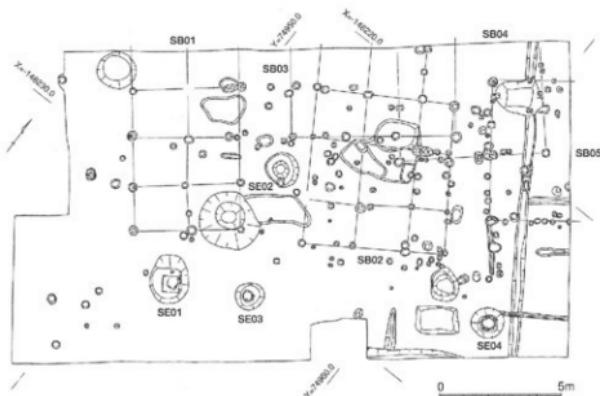


fig. 302 調査区平面図



fig. 303 調査区全景

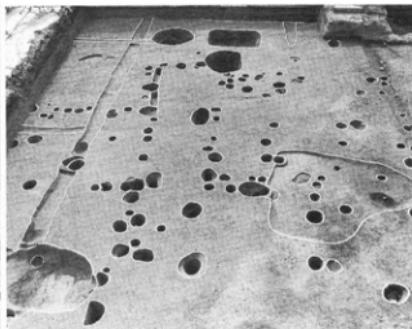


fig. 304 掘立柱建物検出状況

- 井戸** 調査区の中央部に南北方向の自然流路（弥生時代後期の土器を包含）が存在する。検出されたSE04以外の3基の井戸は、この埋没した自然流路上で検出された。
- S E01** 長径2m、短径1.6mの楕円形の掘形の井戸で、深さは検出面から125cmである。井戸枠は縦方向の板材を内法で一辺約70cmの正方形に組み、横樋と四隅の柱で固定している。水溜は曲物の桶の底板を除いた物を上下二段に積んでいる。曲物は、直径約45cm、深さ約25cmである。井戸内からは須恵器・土師器の他に櫛が出土している。
- S E02** 直径約1.4mの円形の掘形の井戸で、深さは検出面から65cmである。井戸枠はすでになかったが、水溜の曲物が残存していた。曲物は直径約40cm、深さ28cmである。埋土より須恵器・土師器片が出土している。
- S E03** 長径1.2m、短径1.1mの楕円形の掘形の井戸で、深さは85cmである。井戸枠はすでになく水溜に利用した桶のタガの部分がわずかに残っていた。タガは直径35cmである。
- S E04** 長径1.4m、短径1.2mの楕円形の掘形の井戸で、深さは検出面から80cmである。水溜の石組の底の部分が一段だけ残っていた。石組は15cm程度の川原石を組んでおり、内法で直径45cmである。水溜内より塗塗りの椀が出土している。

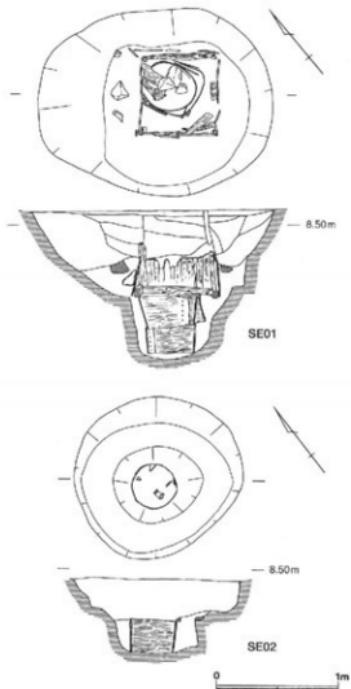


fig. 305 井戸 SE01・02 平・断面図



fig. 306 井戸 SE01



fig. 307 井戸 SE02



fig. 308 井戸 SE03

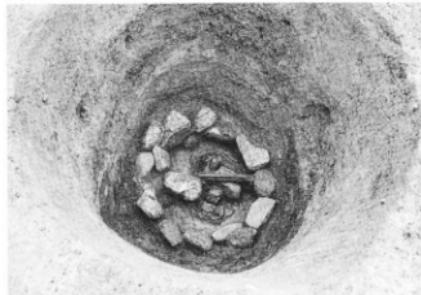


fig. 309 井戸 SE04 石棺検出状況

自然流路

同一遺構面で自然流路を検出した。幅約8m、深さ1.3mを測り、北から南へ流れていたようである。時期は不明であるが、埋土中に弥生時代後期の土器を若干含んでいる。この流路が埋没した後に上記の構造が掘られていることが、切り合いから確認できる。

3.まとめ

今回の調査では鎌倉時代の掘立柱建物が5棟と、それに伴うであろう井戸を4基、13世紀代を中心とする遺物が出土した。掘立柱建物は各々切り合っており、数度の建て替えがあったことがわかる。ただ出土遺物からは明確な時期差ではなく、比較的短期間のうちに建て替えが行われたものと推定される。井戸については、4基のうち3基が埋没した自然流路上に掘られており、湧水が豊富な場所を選んでいることがわかる。

今回は、調査面積が限られていたので、鎌倉時代の集落の一部を検出したにとどまったが、本来はかなり大規模な集落になるであろう。

御船遺跡は、神楽遺跡と同様に莉藻川によって形成された自然堤防（微高地）上に位置する遺跡と考えられる。遺跡は当調査地より北東方向に広がっていると考えられ、今後の試掘調査や発掘調査によってその範囲や構成時期が明らかにされることが期待される。



fig. 310
旗交池全景
(南上空から)

まつ の 42. 松野遺跡 第4次調査

1. はじめに

松野遺跡は、六甲山系から派生する妙法寺川や刈藻川などの河川によって形成された扇状地性低地の中の南北方向の微高地上に立地している。昭和56年に市営松野住宅建設に伴い試掘調査が行われ、弥生時代前期の土器片が発見されたのを機に発掘調査が実施された。調査は、同事業地内において第3次調査まで実施された。その結果、古墳時代中末期から古墳時代後期初頭にかけての整然と配置された掘立柱建物群とそれを囲む柵列が検出され、有力者の館跡と考えられた。

調査地は、JR山陽本線沿いであり、地場産業としてケミカルシューズを代表とするゴム製品工場の密集地帯に位置し、市営松野住宅から南方約80m、現在の海岸線から約9km内陸の標高7m前後の地点である。

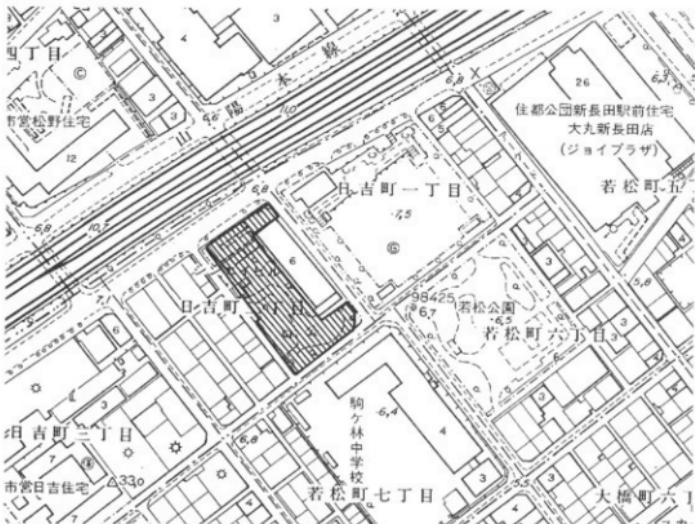


fig. 311
調査地位図
1:2,500

調査の経緯

阪神・淡路大震災により家屋が倒壊、焼失し、もっとも被害の大きかった当地域に新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業が推進されることとなった。その事業地になっている範囲には、北に松野遺跡と南に二葉町遺跡を含む地域であったため、事前に試掘調査を全域にわたり実施した。その結果、今回の調査対象地区内において、良好な遺物包含層と遺構面が存在することが確認され、松野遺跡の範囲がJR線を南に越えて拡がることが判明した。発掘調査を実施するにあたっては、周辺に仮設住宅等が点在するため、まとまった面積において調査をおこなった。

今回の調査は、総面積2,500m²であるが、事業の進行上4区に分けて順次発掘調査を実施していく。遺構番号の始めの数字が各区を表している。

2. 調査の概要

基本層序 現状地盤より50cmは盛土であり、盛土直下T.P.7.000m前後で黒褐色シルト質細砂の遺物包含層がある。この遺物包含層は、10cm～20cmの厚みをもち遺構面を覆っている。遺構面は、黄褐色極細砂シルトと褐色粗砂の層に分けられる。遺構面全体は、南東方向に緩やかに傾斜する遺構面である。



fig. 312
調査区平面図

- 検出遺構** 遺構面は、1面であったが遺構の時期は、鎌倉時代前半と平安時代末と古墳時代後期初頭の3時期が存在した。
- 鎌倉時代前半** 鎌倉時代前半（13世紀）の遺構としては、大型不明土坑2基が検出された。S X1001の規模は、直径3.7m、深さ1.3mで、S X3001は、直径4.6m、深さ1.14mでいずれも平面が円形をしている。いずれも堆積状況の観察から、短期間で埋められたと思われる。
- 平安時代末** 平安時代末（12世紀）の遺構は、掘立柱建物2棟、井戸5基、木棺墓1基、不明大型土坑、ピット、溝が多数検出された。
- 掘立柱建物** 掘立柱建物は、調査区の南端と北端で検出された。いずれも縦柱の掘立柱建物で、S B1004は、各柱穴のまわりに複数柱穴がみられることから建て替えられたものと思われる。
- 掘立柱建物の概要は表1のまとめたとおりである。

遺構名	規 模（梁間・桁行距離・面積）	方向・構造	検出状況等、備考
S B1004	2間×3間（5.0m×4.4m） 42.5m ²	南北棟・縦柱	建て替えの痕跡がある。
S B2001	3間×4間（6.2m×9.2m） 57m ²	東西棟・縦柱	

表1 掘立柱建物の概要（平安時代末期）

S P1099 S P1099は、建物に伴う柱穴としては確認できなかつたが、柱の沈み込みを抑える目的と思われる石と瓦が出土した。

この瓦は、八葉複弁蓮草紋軒丸瓦で瓦当の直径が14cmのものである。中房の蓮子は、1+6個を配し、圓線を巡らせた外区は、珠文を16個配する。模様と瓦当の直径から平安時代後半のものと思われる。

溝 建物の方向と異なっており、集落廃絶後に營まれた耕作地に伴う鶴溝と思われる。

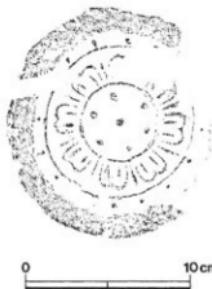


fig. 313 SP1099 出土瓦拓影



fig. 314 1区調査区 全景



fig. 315 掘立柱建物 SB1004

井戸 S E 1001 構造は、四隅に柱を建て竪板を一辺に3枚ならべ、横桟を途中に添えている。竪板は、1枚が幅27cm、長さ88cmである。湧水部には、直径48cmの曲物と直径36cmの曲物を2段に組んで据えられていた。

方形の掘形の周辺に拳大の石や土器片を並べた状態で検出された。石のなかには漁労具の鍼が含まれていた。

また、廃絶後埋める途中で獸の骨が検出され、さらにその下からは拳大の赤色と白色のチャート質の石を並べた状態で検出された。(fig.317)

さらに下層からは、直径25cmの小型曲物が検出され、湧水桶の中からは須恵器の椀が2個出土した。この椀の横からは人形の木製品が1点出土した。これは、井戸の廃絶と共に埋める際に“まじない”を行ったものと思われる。(fig.318)

S E 1002 直径0.9m、深さ0.8mの円形の素掘りの井戸である。この井戸の底からは、杓の柄と思われる木の棒が刺さった状態で検出された。

S E 2001 一辺が1.1m、深さ0.7mの規模であり、平面形が方形である。中には何も施設がないため、井戸であるか不明である。底には、長さ24cmの人間の足跡が残っていた。

S K 3025は、直径1.1m、深さ1.22mで底に直径46cmの曲物が据えられていた。出土遺物から平安時代後半の井戸と思われる。

木棺墓 S T 3001 遺構の底に底板と、供獻土器とその側から人間の歯が出土したことから平安時代後期の木棺墓と思われる。

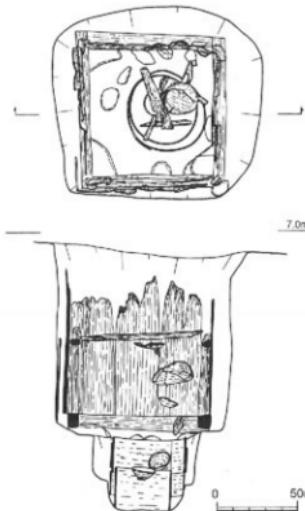


fig. 316 SE1001 平面図・断面図



fig. 317 井戸 SE1001 上層骸骨出土状況



fig. 318 SE1001 完掘状況

**古墳時代後期
の遺構**

古墳時代後期（6世紀初頭）の遺構は、堅穴住居3棟、掘立柱建物15棟、土坑4基、溝3条、井戸1基、ピット多数が検出された。

堅穴住居 SB1001は4.0m×4.2m、面積16.8m²の方形のものである。柱は4本柱で、北辺と東辺には周壁溝の痕跡が検出された。SB1002は4.8m×2.2m以上、面積不明の方形のものである。西半分が攢乱され、規模は不明である。SB1003は4.4m×4.4m、面積19.4m²の方形のもので、柱は4本柱で西辺に直径1.3mの土坑を検出した。

掘立柱建物 掘立柱建物は、調査区の各所で検出されたが、調査区中央を東西に走る溝SD3001の南側で総柱掘立柱建物が集中する場所がある。また、堅穴住居はこの溝の北側でのみ検出されている。検出された15棟の掘立柱建物の規模、構造などは下記の表2とおりである。

遺構名	規 模（梁間・桁行距離・面積）	方向・構造	検出状況等、備考
SB1005	2間以上（4.0m以上）	不 明	調査区外に位置する
SB1006	2間×2間（5.2m×3.4m）	18.0m ²	東西棟・総柱
SB2002	2間×3間（3.5m×4.2m）	14.7m ²	東西棟・側柱
SB3001	3間×4間（5.6m×6.3m）	35.3m ²	東西棟・側柱
SB3002	2間×3間（3.9m×4.5m）	17.6m ²	南北棟・総柱
SB3003	2間×2間（3.2m×4.0m）	12.8m ²	東西棟・総柱
SB3004	2間×3間（3.6m×4.5m）	16.2m ²	南北棟・総柱 S B3003・3009と切り合う
SB3005	2間×3間（2.6m×3.7m）	9.7m ²	南北棟・総柱
SB3006	4間×4間（5.6m×6.4m）	35.8m ²	東西棟・側柱 S B3010と切り合う
SB3007	2間×2間（3.0m×4.0m）	12.0m ²	東西棟・総柱
SB3008	2間×2間（2.3m×3.4m）	7.8m ²	東西棟・側柱
SB3009	2間×4間（4.7m×4.5m）	21.2m ²	東西棟・総柱 S B3004と切り合う
SB3010	2間×2間（2.6m×3.4m）	9.0m ²	東西棟・総柱 S B3006と切り合う
SB3011	1間×2間（2.0m×3.7m）	8.0m ²	東西棟・側柱
SB4001	1間以上×2間（1.4m以上×3.8m）	不 明	調査区外に位置する

表2 掘立柱建物の概要（古墳時代後期）

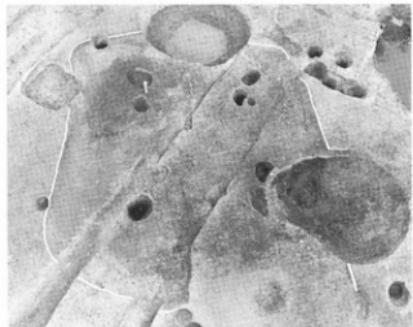


fig. 319 堅穴住居 SB1003



fig. 320 掘立柱建物 SB3001



fig. 321 SD3001

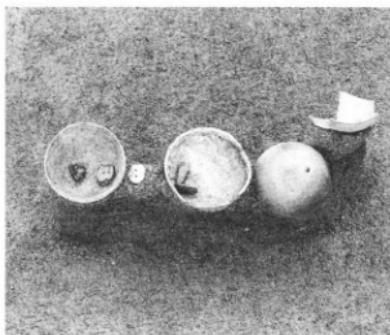


fig. 322 SD3001 遺物出土状況

溝 S D 3001 幅 1 m、深さ 16cm の東西に流れるもので、溝の中からは古墳時代後期の須恵器と白玉が多数と滑石製有孔円盤 2 点が出土した。

3. まとめ

今回の調査において、はじめて平安時代後半から鎌倉時代前半にかけての集落址が発見された。鎌倉時代前半期に、耕作地として利用されていた時期に造営された、不明大型土坑については地域的特色を持った遺構と思われ、今後の用途の解明が期待される。

古墳時代後期の遺構としては、第 1 次調査で豪族の居館が発見されたが、その時に確認できなかった周辺の集落を確認することができた。今回検出された掘立柱建物は、建物の方向や重複関係から 2 ~ 3 時期の時期差が考えられる。S B 3001 と S B 3006 は、側柱建物で比較的規模の大きな建物であることから住居であった可能性が高い。他の掘立柱建物は、2 間 × 3 間程度の総柱建物で柱間の短いものが多いことから、倉庫として利用されていたものが大半を占めていたと思われる。また、4 次 - 3 調査区のほぼ中央において検出された溝 (S D 3001) の北側には、堅穴住居が検出されるが、南側では検出されないことから集落内を区画するための溝と思われ、溝の中から須恵器の杯と蓋を並べてその中に滑石製の有孔円盤や白玉といった祭祀関連遺物が検出されたことも区画溝として機能していたことを示唆している。

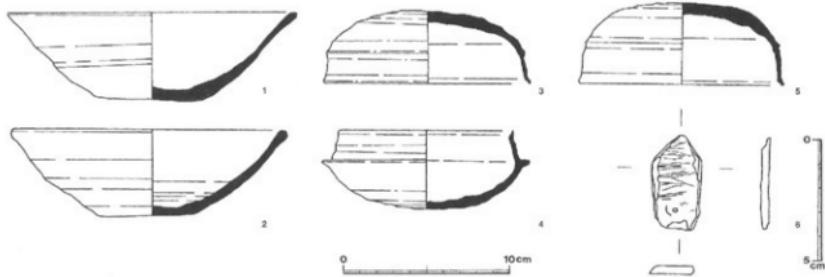


fig. 323 出土遺物実測図
(1・2. SE1001 3~6. SD3001)

まつ の 43. 松野遺跡 第5次調査

1. はじめに

松野遺跡は、古墳時代を主体とする遺跡であることが第1～3次調査や第4次調査から明らかになっている。今回、この地も新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業の事業範囲内に含まれることになり、本体建物建設に先行してこの地の仮設建物を建設することになったため、発掘調査を実施することになった。

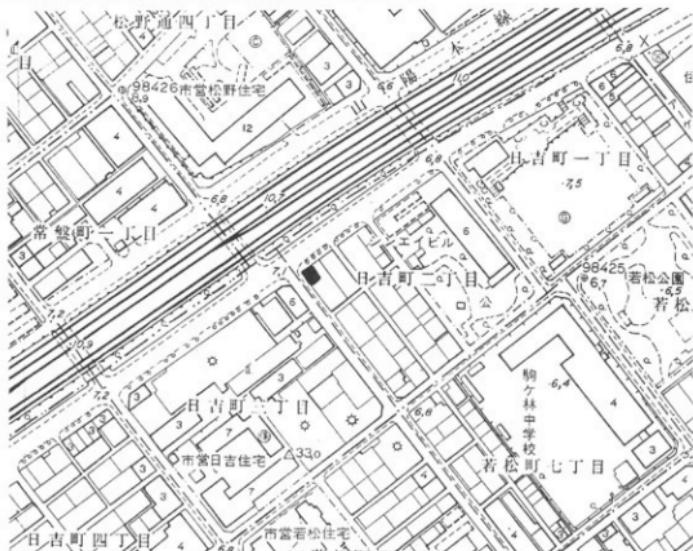


fig. 324
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

調査の結果、基本層序は第4次調査地と同様で、第1層が表土層、第2層が旧耕作土、第3層が床土、第4層が遺物包含層で第5層上面が遺構面となる。ただし、第4次調査地と比較すると遺物包含層はやや希薄な状況になってきている。

検出された遺構は土坑、不定型落ち込み、溝、ピットなどがある。

溝、ピットについては出土遺物が少なく、時期の確定が困難なものもあったが、古墳時代の遺物を出土する遺構の埋土と共に通するものが多いことから、古墳時代を主体としているものと考えられる。

今回の調査で遺物が比較的まとまって出土した遺構が、検出当初竪穴住居ではないかと考えられた落ち込み（S X01）である。この遺構の中からは、古墳時代後期の須恵器、土師器が出土している。また、この落ち込み（S X01）に切られる形で検出された土坑（S K01）からも古墳時代後期前半の須恵器のほか完形品が数個体出土しており、この遺構は古い前後して築かれて遺構であると考えられ、この地にも集落域が広がっていることが確認された。

3.まとめ

今回の調査で、当地にも古墳時代の集落が広がることが明らかになった。しかし、今回出土した遺物は第4次調査（古墳時代中期末）で出土した遺物よりも、一段階新しい段階のもので、この周辺には若干時期を異にする段階の集落が広がっているものと考えられ、さらに西側へも集落が広がり松野遺跡の集落域の広がりを追求する上で極めて貴重なデーターを提示したといえる。

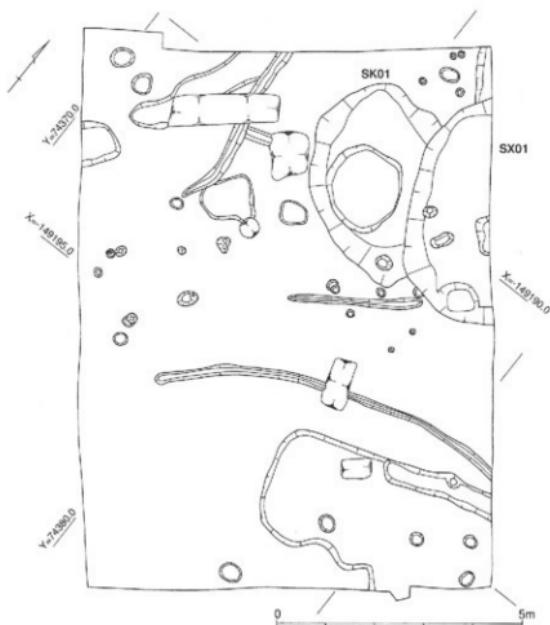


fig. 325 調査区平面図

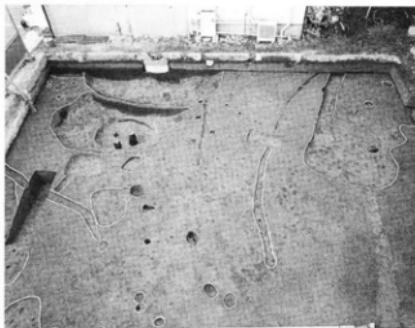


fig. 326 調査区全貌



fig. 327 土壌 SK01

44. 二葉町遺跡 第3次調査

1. はじめに

阪神・淡路大震災により家屋が倒壊し、焼失した当地域を新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業として都市計画局により推進されることになった。

この事業地内には、北に松野遺跡と南に二葉町遺跡を含む地域であったため、事前に試掘調査を全域にわたり実施した。その結果、今回発掘調査の対象地区において、良好な遺物包含層と遺構面が存在することが確認された。

二葉町遺跡は、昭和63年にマンション建設に伴い発掘調査を実施した第1次調査をはじめとし、そのさらに南方100mの地点において第2次調査が実施された。

今回の調査で第3次調査となり、第1次調査の東隣に位置する。現在の海岸線からは約500m内陸の標高4m前後の地点である。これまで2回の調査の結果、縄文時代晩期末の遺物包含層と平安時代末から中世の集落址が発見されている。



fig. 328
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

調査地は、駒ヶ林村と野田村に隣接しており、はやくから市街地が形勢された地区である。遺構面までが現状地盤より40cmと比較的浅く、建物基礎による攪乱が多いが、層序には大きな乱れは認められなかった。

基本層序

現状地盤より40cmは盛土であり、T. P. 4.200mで近世耕作土層が確認された。その耕作土層の下層T. P. 4.100mの暗茶褐色シルト質細砂が遺物包含層であり、T. P. 4.000mの乳茶褐色シルト質極細砂が遺構面を形成する。

検出遺構

掘立柱建物が4棟、井戸3基、土坑7基、不明大型土坑2基、溝、ピット多数を検出した。検出された遺構は、概ね調査区の南半に集中している。

掘立柱建物

S B02~04の主軸はほぼ同一方向であり、同時期に存在したと思われるが、S B01の主軸のずれや、S B03と05の切り合い関係から時期差があるものと思われる。それぞれの掘立柱建物の概要は、表1のとおりである。

造構名	桁行×梁間	規 模 (柱穴間の距離)	構 造	時 期
S B01	3間×2間以上	5.8m×3.8m以上 (1.8m)	総 柱	平安時代末期
S B02	3間×2間	5.8m×5.0m (2.1m)	総 柱	平安時代末期
S B03	5間×4間	12.3m×8.5m (2.3m)	総 柱	平安時代末期
S B04	4間×2間	8.3m×4.3m (2.2m)	総 柱	平安時代末期
S B05	2間以上×1間以上	7.0m以上×3.3m以上 (2.5m)	不 明	平安時代末期

表1 掘立柱建物の概要

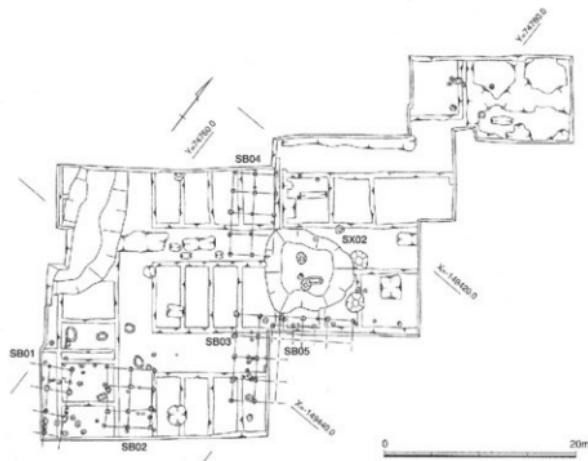


fig. 329 調査区平面図



fig. 330 調査区西半分 全景

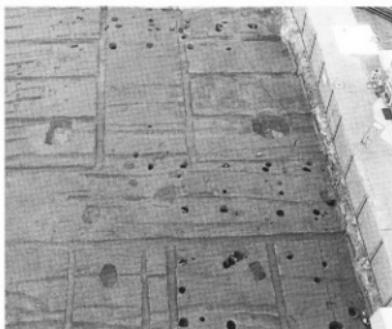


fig. 331 掘立柱建物群検出状況

井戸 S E01 S E01は直径2m、深さ1mの円形のものであったが、木枠などの井戸に付帯するものは確認されなかった。

S E02 S E02は、直径1.8m、深さ4mの円形掘形のものである。この井戸の構造は、方形堅板組で、堅板は1枚が幅20cm、長さ1.8mのものを一辺に4枚ならべ、横棟を2段添えた状況で検出された。この枠組は、西から東の方向に井戸の掘形の地崩れにより崩壊した状況で検出された。

下部構造としては、四隅に偏平な石を据え、高さ20cmの柱枠を設置し、その下に高さ30cmの板で一辺50cmの枠を設け、さらにその下部に湧水桶として、曲物が2段設置されていた。この曲物は上部のものが直径42cmで高さ20cmの大きさで、この中から須恵器の椀と直径25cm高さ20cmの底板の付いた曲物が投棄された状態で出土した。下部の曲物は直径38cmで高さ25cmの大きさのもので、中からは何も検出されなかった。

不明大型土坑 S X01は調査区の西北隅で検出されたため、正確な規模は不明であるが南北に24m、東西に5.5m、深さ1.5mの規模をもつ平面が長楕円形をした土坑である。この中からは、土師器、東播磨系須恵器、播磨産の軒平瓦、瓦器、青磁、白磁が出土した。

S X02は、直径10m、深さ1.5mの規模をもつ平面が円形をしているものである。中からは、S X01から出土したものに漆器碗が出土している。

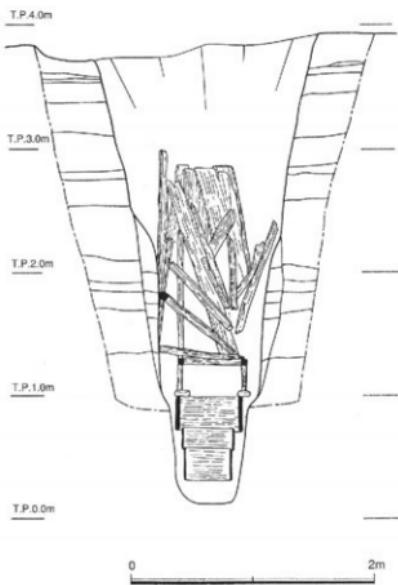


fig. 332 井戸 SE01 断面図

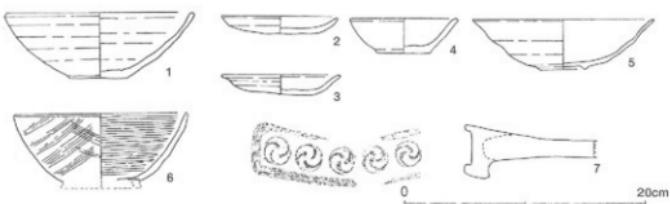


fig. 333 井戸 SE02



fig. 334 井戸 SE02 下部枠組み

下層断ち割り 調査区北中央において弥生時代前期古段階の壺が出土したため、南北方向に断割り調査を行った。その結果、調査区の北の一部に暗茶褐色シルト質板細砂層がレンズ状に堆積しており、その中に流れ込んで出土したものと思われる。その他遺物は確認されなかった。



1～3・6. SE02 (1. 須恵器 2・3. 土器器 6. 瓦器)
4. SB04 (須恵器) 5. SP127 (瓦器) 7. SX01 (軒平瓦)

3.まとめ

今回の調査では、平安時代末期（12世紀末頃）の掘立柱建物が5棟検出された。S B01～04の4棟は主軸を北西方向にもち、切合い関係も認められない事からほぼ同時期に存在してたものと思われる。平安時代末の集落内での建物配置を知る貴重な資料である。S B01の主軸は北北西方向で、掘溝の方向と一致することからS B02～04より新しい時代のものである。S B05はS B03と切合い関係があるため、時期差があるものと思われる。

井戸2基についても、出土遺物から平安時代末（12世紀末）である。S E02は、最底部でT. P. 0.120mで遺構面から4mも掘削されていることから、かなりの渇水期に構築されたものと思われる。平安時代末期には、平家の政権をゆるがすもととなった養和の大飢饉（1082年）が渇水のため発生しており、水を求めて深く掘られたものと思われる。

大型不明土坑については、小型の曲物などが出土していることから水利関連遺構と考えられる。平安時代末の集落廃絶後に耕作地になり、その際掘られた水溜めとして利用されたものと思われる。また、今回の調査で初めて弥生時代前期の土器が出土しており、二葉町遺跡内または、この付近に弥生時代前期の遺跡が存在するものと思われる。



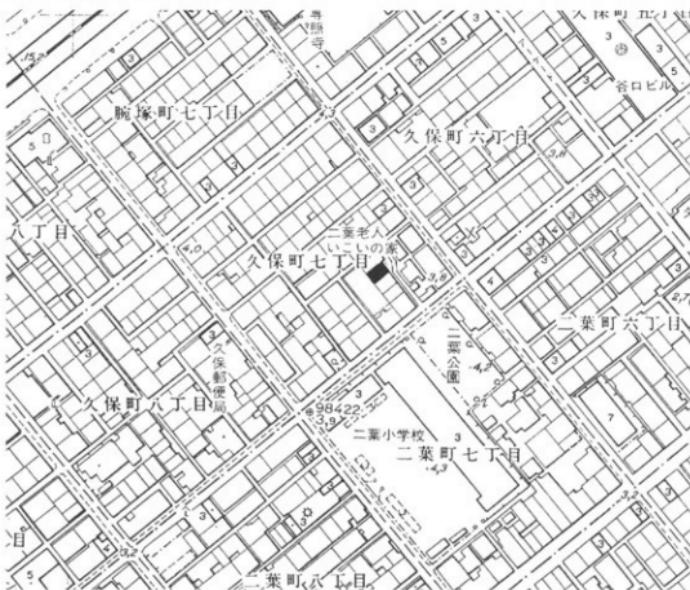
ふたばちょう 45. 二葉町遺跡 第4次調査

1. はじめに

二葉町遺跡は、神戸市北西部の六甲山系から大阪湾へ流れ込む大小河川によって形成された標高約4mの扇状地に位置する。

過去の調査は、平成元年の1次調査・平成5年の2次調査において井戸・土坑・掘立柱建物等の遺構を検出している。主な遺物を占める時期は12~13世紀にかけての資料である。平成8年度は、第4次調査の他に第3次調査を震災復興事業で神戸市教育委員会が調査を行っている。

現地は、震災の被害が大きかった長田区にあり、火災による影響は免れていたが道路1本隔てた北側と東側はほぼ全焼していた。この地に個人住宅の計画の届出があり、確認調査を平成8年10月11日に実施した。その結果、遺物包含層が確認されたため、工事影響範囲について発掘調査を実施した。



2. 調査の概要

調査地は、周囲を家屋と生活道路に囲まれていたため、調査区壁の崩壊を防止するために調査区周囲に余地を設けた。7.8m×4.5mのトレンチを設定し調査を開始した。

基本層序

第1層表土。35~45cmの厚さがあり、客土を20cm埋土している。第2層は、暗灰黄色砂質土。厚さ約10cm堆積する。第3層、明黄色弱砂質土。厚さ約20cm堆積する。第4層は、黒灰色粘質土。中世の遺物を包含し、南壁に落ち込みの断面が認められた。平均堆積土の厚みが約10cmある。第5層、暗黄茶色砂質土。地表面。

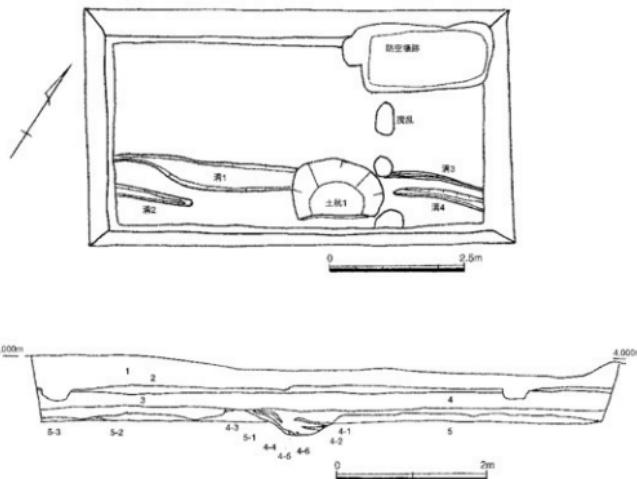


fig. 338 調査区平面図・断面図

検出遺構

遺構は、黒灰色粘質土を覆土にする犁状溝4本と土坑1基を5層上面で検出した。溝の幅は、最大50cmで平均幅約20cm程度。深さは約10~20cm程度で東西方向に延びている。

土坑は、調査区の南東側に東西約1.7m、深さ約18cmの楕円形状のプランを呈し、犁状溝を切り込んで検出した。遺物に磨耗した土師器等の小片が6点出土している。

この他に太平洋戦争中に作られたと思われる防空壕1ヶ所と現代の攪乱孔3ヶ所を確認している。

遺物

白磁碗類、須恵器系統・鉢類、瓦質土器、土師器等の中世の遺物が第4層から出土している。出土点数は、50点程である。

3.まとめ

第4層より出土した遺物によって12~13世紀にかけての時期にあたる遺跡であることが明らかとなったが調査範囲が狭く、遺跡全体を把握するまでには至っていない。

しかし、犁状溝跡を検出したことから中世の時期には水田耕作が行われていたと考えることが可能である。また、土坑については、犁状溝を切り込んでおり若干の時間差が考えられるが、性格については6点の土師器片等が出土したのみであり、現状では不明と言わざるを得ない。

第1次調査の掘立柱建物を検出した地点から今回の調査地点までの距離は、直線で約80m程南西側部分にあたり、中世の集落の周辺に広がる水田地帯があったと推定される。

46. 戎町遺跡 第22次調査

1. はじめに

平成7年1月17日に起きた阪神・淡路人震災では、神戸市須磨区板宿地区一帯は甚大な被害を受けた。今回の調査は、震災で倒壊した工場の跡地に、被災者を対象とした市営住宅の建設の計画が上がり、その工事に伴って行われた調査である。

戎町遺跡ではこれまでに21次に亘る調査が行われており、縄文時代晩期から中世に至る様々な遺構・遺物が見つかっている。今回の調査地は地表面においては標高13.0m付近に位置し、北から南に向かって緩やかに下がっている扇状地もしくは後背湿地に立地する。

今回の調査地はこれまでの戎町遺跡の範囲南端よりも外であったが、遺跡の範囲に隣接することから、試掘調査を実施した結果、弥生時代の遺物包含層が確認された。このことにより、戎町遺跡の範囲が南に広がることが確認され、調査を実施することとなった。



fig. 339
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査地における基本層序は上から、現代の盛土・灰色砂（旧耕土）・淡灰色砂（中世後期～近世耕土）・暗灰茶色粘質シルト（古墳時代後期遺物包含層）・淡灰茶色粘質シルト（古墳時代後期遺構面＝第1遺構面）・淡黄褐色砂質シルト（古墳時代初頭遺構面＝第2遺構面）・明黄白色粘質シルト（古墳時代初頭遺構面＝第3遺構面）・黒褐色粘質シルト（弥生時代中期遺物包含層＝第4遺構面）・黒灰色粘質砂（弥生時代中期遺物包含層）・青灰色シルト（弥生時代中期遺構面＝第5遺構面）・暗灰色粘土（弥生時代前期遺構面＝第6遺構面）となる。

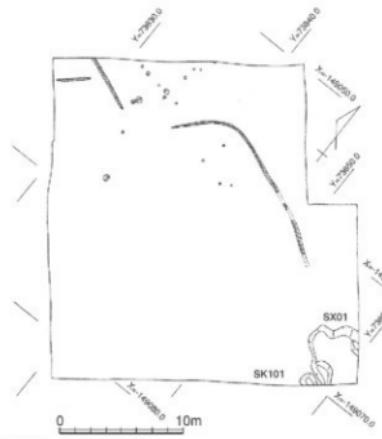


fig. 340 第1遺構面平面図



fig. 341 第2遺構面平面図

第1遺構面 第1遺構面は、古墳時代後期の遺構面である。工場の基礎等の擾乱が多く、遺構の残存度は悪い。下記の遺構の他に、溝3条とピット20個が確認された。

S K 101 調査区外に延びているため全形は不明である。1.0m×1.5m程度の楕円形の土坑と考えられる。深さは0.4mを計る。

S X 101 調査区外に延びているため全形は不明である。調査区内で検出されたのは4m×4m以上の不定形の落ち込みである。南東方向に向かって徐々に深くなっている。埋土の状況から沼状の落ち込みと考えられる。埋土中から6世紀中頃の須恵器の坏身が出土している。

第2遺構面 第2遺構面は、古墳時代初頭（庄内併行期）の遺構面である。

掘立柱建物 S B 202 は1間×2間の掘立柱建物である。建物の規模は南北方向が3.0m、東西方向が2.5m、柱間は南北方向が1.5m、東西方向は2.5mを測る。柱穴堀形の直径は25~30cm、柱痕の直径は15cmを測る。



fig. 342 第2遺構面（古墳時代初頭）全景

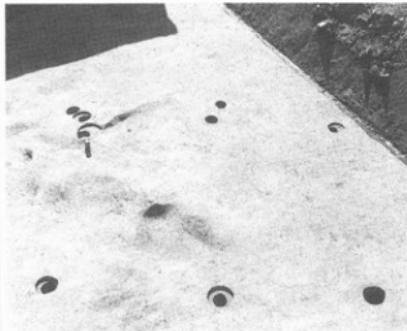


fig. 343 掘立柱建物 SB202

竪穴住居

S B201

4棟の竪穴住居が検出された。住居の規模や平面形等の概要は、表1のとおりである。

S B201は壁際に周壁溝を巡らし、床面には黄白色の粘土を貼っている。この住居址では、床面からの出土遺物はほとんどない。

S X201

竪穴住居 S B201が廃絶した後、住居内に上砂が堆積し、凹地状になったところに多量の土器や礫を投棄している。出土遺物としては、土師器の壺、壺等や台石、砥石等が出土している。

S B203

S B203の周壁溝は東壁にのみ存在する。北側と西側に張出部を持ち、西側の張出部は土坑状になっているが、北側の張出部はその内側に粘土を置いて階段状になっていることから、入口と考えられる。南壁際の中央には、浅い土坑が存在する。住居の中央には、直径60cm、深さ8cmの炭の詰まった浅い土坑が存在し、その南には粘土上で土手状の高まりを築いている。この粘土は火を受けた跡があり、これらの施設は炉跡と考えられる。中央土坑の直ぐ横には25cm×35cmの凝灰質砂岩製の台石が置かれていた。

廃絶後、ある程度住居内に土砂が流入した後に上屋の部材が焼けており、その直後に多量の土器、台石、礫を投棄している。これらの土器類には、壺・壺・高壺等がみられる。

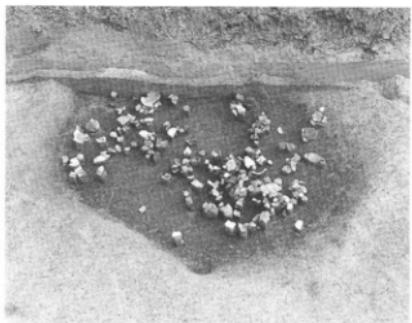


fig. 344 SX201 遺物出土状況



fig. 346 竪穴住居 SB203 遺物出土状況

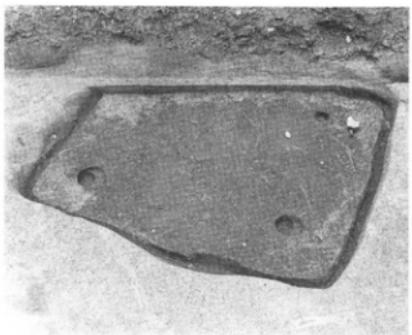


fig. 345 竪穴住居 SB201



fig. 347 竪穴住居 SB203

- S B204 大半が調査区外に位置し、住居のコーナー部分一角が検出されただけである。周壁溝は東壁と南壁の一部に存在する。床面には S B201 と同様の黄白色の粘土を貼っている。コーナー付近から台石が出土しているほか、土器等は小片のみである。
- S B205 4 本柱の竪穴住居と考えられるが、北半部が調査区外にあたり、主柱穴 2 基と住居の南東隅が検出された。主柱穴の間隔から一辺約 7 m の竪穴住居と考えられる。
- S K209 長辺 2.2 m、短辺 1.5 m、深さ 0.65 m の長方形の土坑である。床面から約 20 cm 程度の土を入れ、その上面で藁状のものを焼いたと思われる炭層がある。またこの面に、2 個の人頭大の石を置いている。その後、若干埋まつた後に多量の土器を投棄している。

遺構名	規 模 (m)	平面形	種柱穴本数 (柱穴規模)	柱穴間距離 (m)
S B201	3.3×2.6、深さ 0.3	隅丸長方形	4 本 (掘形径 30 cm・柱痕径 15 cm)	東西 2・南北 1.4
S B203	4.8×4.0、深さ 0.3	隅丸方形	2 本 (掘形径 20 cm・柱痕径 15 cm)	1.8
S B204	※ 2×2、深さ 0.3	隅丸方形	調査区内では検出されず不明	不明
S B205	※ 6.0×2.6、深さ 0.6	隅丸方形	4 本 (掘形径 30 cm・柱痕径 18 cm)	4.0

表 1 第 2 遺構面検出竪穴住居の概要

*印については、遺構が調査区外に延びる為、堆出長を表す。



fig. 348 竪穴住居 SB204

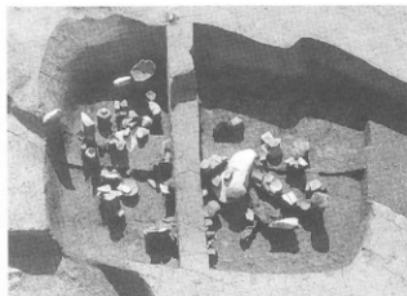


fig. 350 SK209 遺物出土状況

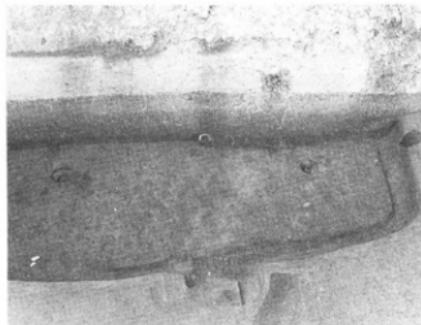


fig. 349 竪穴住居 SB205

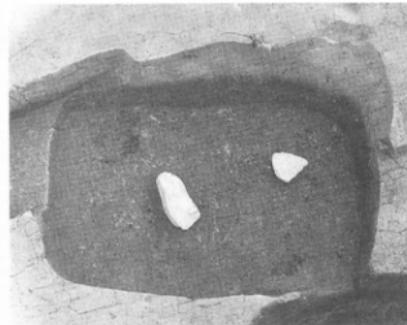


fig. 351 土坑 SK209

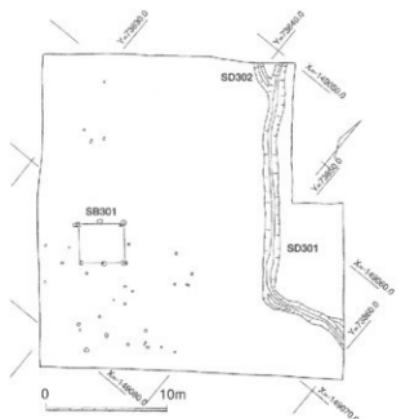


fig. 352 第3遺構面平面図

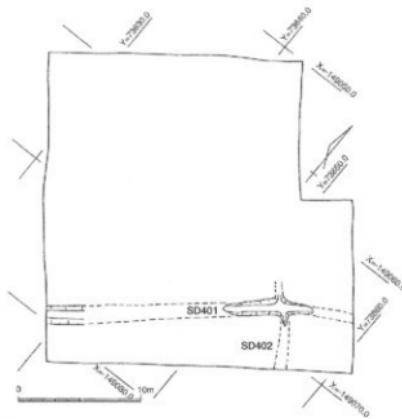


fig. 353 第4遺構面平面図

第3遺構面 第3遺構面は遺物が小片で少なく、時期を確定することは難しいが、第2遺構面とはほぼ同時期の古墳時代初頭（庄内併行期）と考えられる。

S B301は1間×2間の掘立柱建物である。建物の規模は南北方向が3.2m、東西方向が3.8m、柱間は南北方向が3.2m、東西方向は1.9mを測る。柱掘形の直径は40~60cmと、この時期としては大きい。柱痕の直径は20cmを測る。

S D301は幅1.3m、深さ30~40cmの溝である。調査区の北端付近ではS D302が合流して北西から南東方向に流れるが、調査区の南端付近でやや東に屈曲する。

第4遺構面 第4遺構面からは遺物がほとんど出土せず時期はあきらかではないが、層序より弥生時代中期以降、古墳時代初頭以前の遺構面である。

この面は、畦畔こそ確認されなかったが、稻株痕が多数検出されたことから、水田跡と考えられる。よってS D401・402は水田に伴う水路と思われる。この溝は、幅1.0m、深さ0.1mと非常に浅いが、底面に黄白色の粘土を貼って、丁寧に造られている。

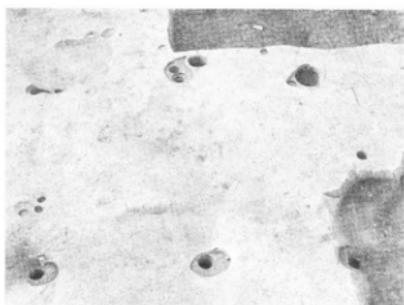


fig. 354 第3遺構面 SB301

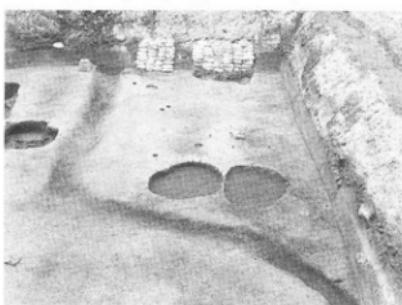


fig. 355 第3遺構面 SD301



Fig. 356 第5遺構面平面図

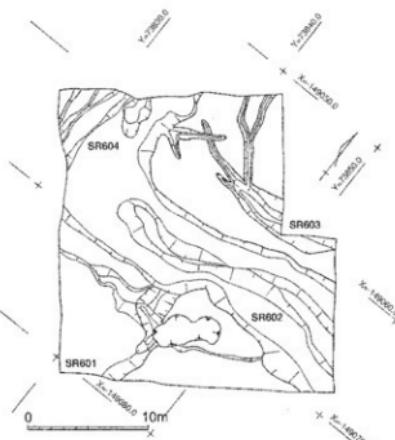


Fig. 357 第6遺構面平面図

第5遺構面

弥生時代中期初頭（第II様式）から中期中頃（第III様式）の遺構面である。

S B501は直径4.5mの円形の堅穴住居である。深さは0.2mを計る。主柱穴は2本で柱間は2.0mで、柱穴の直径は30cm、深さは30cmを計る。主柱穴の間に灰、炭の詰まつた中央土坑が存在する。この中央土坑の直径は100cm、深さは40cmを計る。遺物は小片のみのため時期の確定は難しいが、弥生時代中期前葉（第II様式）の住居址と考えられる。

S D501は西から東に向かって流れる幅約3mの溝である。調査区外に續くが調査区の東端では急に深くなり深さ0.8mを測る。この部分では断面の形状がV字形を呈する。この溝からは、弥生時代中期初頭（第II様式）の土器と石斧片が出土している。土器のなかには、朝鮮系無文土器の系譜を引くと思われる土器が出土している。（fig. 361）

S K501は長径2.2m、短径1.4m、深さ0.3mの長楕円形の土坑である。断面の形状は、すり鉢形を呈する。S D502・503と繋がっており、水溜め状の遺構と考えられる。この土坑から、弥生時代中期中頃（第III様式）の遺物が多数出土した。

S K509は長径2.2m、短径1.8m、深さ0.3mの長楕円形の土坑である。断面の形状はすり鉢形を呈する。弥生時代中期中頃（第III様式）の遺物が多数出土した。

調査区の西半では、多数の土坑が検出された。そのほとんどは、長径0.8~1.3m、短径0.4~1.0mの楕円形で、断面の形状は逆台形を呈する土坑である。

また、調査区全域で多数のビットが検出されたが、現在のところ建物としてまとまるかどうかは検討中である。

第6遺構面

第6遺構面は弥生時代前期後半（第I様式新段階）の遺構面である。

この遺構面では、幅8m、深さ1.0mの河道が検出された。この河道は北方から流れ、調査区内で大きく蛇行して南東方向に行く流れと、南西方向に行く流れとに分流する。その流れは早かったようで、堆積土はほとんどが砂礫である。堆積土中からは、完形に近い壺、甕が数点と多くの土器片及び、石包丁・石斧・すり石・礫石等の石器類が出土した。



fig. 358 第5遺構面 北半分全景

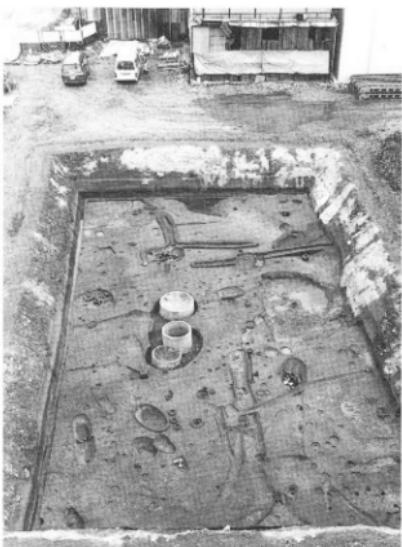


fig. 359 第5遺構面 南半分全景



fig. 360 第5遺構面 穴穴住居 SB501

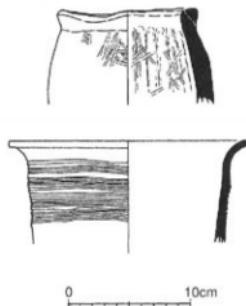


fig. 361 第5遺構面 SD501 出土遺物

暗灰色粘土層

第6遺構面のベースである暗灰色粘土層から、若干の縄文時代晩期の長原式に併行する突帯紋土器が出土している。この層は後背湿地の堆積と考えられ、遺構は検出されなかつたが付近にこの時期の遺構が存在するものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査は、これまで調査されてきた戎町遺跡の南端にあたるが、多くの造構が検出され、遺物も多数出土した。今回出土した遺物や検出された造構の時期はこれまでの戎町遺跡の調査で確認されている時期のものと同じであるが、造構の密度や、遺物の量もこれまでの調査と変わり無いことから、今回の調査地も遺跡の中心に近いところと思われる。その結果、遺跡の範囲はさらに南に延びるものと考えられ、遺跡の範囲は南北約0.7kmと広大な範囲となり、この地域における弥生時代から古墳時代にかけての拠点的な集落の一つであると考えられる。



fig. 362 東上空から見た戎町遺跡の全貌（A点・B点の交点が調査地点）

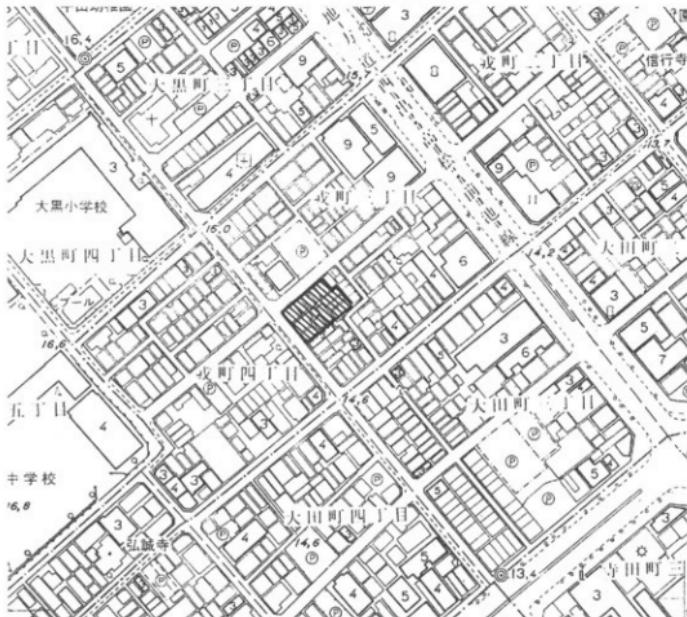
えりまちよせき 47. 戻町遺跡 第24次調査

1. はじめに

戻町遺跡は、山陽電鉄板宿駅の南北に広がると推定され、妙法寺川左岸の扇状地末端の微高地に立地する遺跡である。

これまでの調査で、縄文時代晚期から古墳時代前期および中世の複合遺跡であることが判明してきている。なかでも、弥生時代～庄内期の遺構・遺物が多く確認され、西摂津の最西端に位置する弥生時代の撲点集落と考えられる。

今回の第24調査地点は、戻町3丁目に位置し、第21次調査地に隣接する。駐車場・共同住宅建設予定地で、震災の復興調査である。調査対象面積は、約450m²である。



2. 調査の概要

今回の調査では、試掘調査の成果に基づいて、現地表下より、2mまでの深さについて、中世面1面・弥生時代5面、計6面の遺構面について全面発掘調査を実施した。

盛土下に旧耕土が存在し、幾つかに分層が可能な砂を主体とする層が存在する。その下に、遺物を含む旧耕土と床土が存在し、床土下面が、第1遺構検出面となる。西半部分では、床土が存在せず、旧耕土直下で、遺構検出面となる。東半部分では、黒褐色の粗砂を遺構検出面とするが、西半部分では、黄灰色のシルト又は粗砂を検出面とする。

弥生時代の遺構面は、古墳時代前期の自然河道によって寸断されており、北西隅と南西隅にのみ存在するだけであった。

第1遺構面 古墳時代前期および鎌倉時代前期の遺構が同一面で確認された。検出された遺構は、土中世遺構面 坑32基、溝10条、井戸2基、性格不明遺構7基、ピット195基を確認した。多数検出されたピットの内から2間×3間の掘立柱建物1棟（S B01）が復元できた。

検出された土坑、溝の規模、形状、時期等については表1にまとめたとおりである。この内で、SK04は、底に自然石が数個出土しており、SX01と同様な検出状況であった。

遺構名	規模(m)	形状	検出状況	時期
SK03		小 明	SD05に切られ形状不明	14世紀後半
SK04	深さ0.3m	不 明	底に自然石数個を検出	
SK05	直径0.9m、深さ0.7m	円 形	SD04により切られる	14世紀後半
SK06	長さ1.0m、幅 0.7m、深さ0.1m	不整形	SD07により切られる	
SK07	長さ1.8m、幅 0.7m、深さ0.2m	長方形	ピットにより切られる	
SK08	長さ1.5m、幅 0.7m、深さ0.22m	長方形	ピットを切る	14世紀後半～15世紀
SK09	長さ1.2m、幅 1.05m、深さ0.1m	不整形		
SK10	直径0.65m、深さ0.54m	円 形	S X06により切られる	
SK14	長さ1.8m、幅 1.8m、深さ0.21m	方 形	ピットを切る	
SK15	深さ0.15m	円 形		
SK17	長さ1.15m、幅 1.0m、深さ0.42m	不整形	S K18を切る	
SK18	長さ2m以上、幅 1.0m、深さ0.42m	不整形	S K17により切られる	
SK19	幅 0.5m、深さ0.18m	不整形		
SK25	長さ0.9m、幅 0.24m	不整形		
SK32	長さ0.5m、幅 0.25m	不整形		

表1 第1遺構面検出 土坑一覧

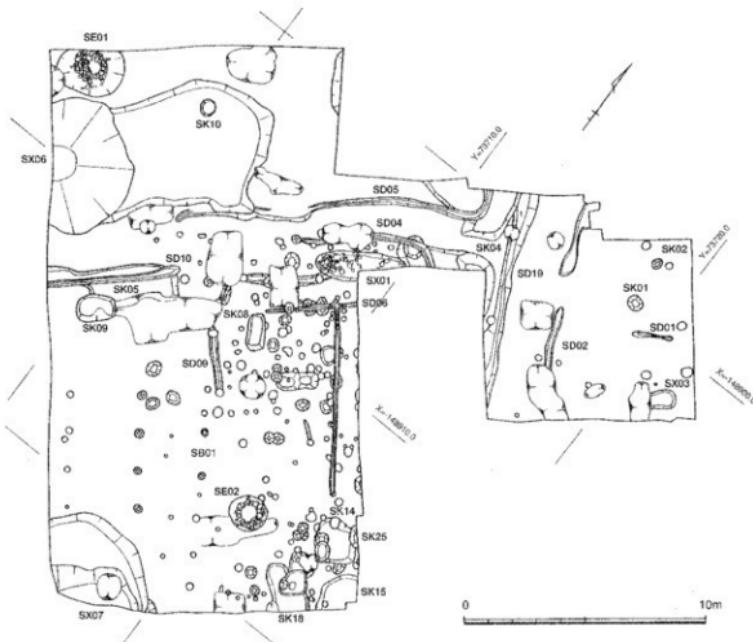


fig. 364 第1遺構面 平面図

- 性格不明遺構 調査区中央に位置し、長さ3.7m、幅1.0m、深さ0.15mを測る長方形の土坑である。
- S X01 土坑は、浅い落ち込みであり、土坑内には掘り拳大から人頭大位の大きさの石がまばら出土しており、この石の上下からある程度まとまった遺物が出土している。
- 切り合い関係はS D03に切られている。出土遺物としては、土師器鍋・皿、須恵器鉢、石鍋、瓦器塙等が出土しており、これらの遺物から14世紀後半の時期が想定される。
- S X03 調査区の東端に位置し、長さ1.05m、幅0.72m、深さ0.18mを測る方形の土坑である。
- S X05 調査区の西端に位置し、長さ3.8m、深さ0.30mを測る遺構である。擾乱等のため、形状は不明である。

遺構名	規 模 (m)	検出状況 (方向・切り合い関係)	時 期
S D01	幅0.2m、深さ0.07m	北東から南西に走る	
S D02	幅0.35m、深さ0.02m	北西から南東に走る	
S D03	幅0.25m、深さ0.05m	北東から南西に走る・S X01を切る	
S D04	幅0.15m、深さ0.1m	北西から南東に走る・S K05を切る	14世紀後半から15世紀
S D05	幅0.35m、深さ0.05m	北東から南西に走る S K03を切る	14世紀後半
S D06	幅0.2m、深さ0.05m	北東から南西に走る	
S D07	幅0.2m、深さ0.05m	北西から南東に走る	
S D08	幅0.40m、深さ0.1m	北西から南東に走る	
S D09	幅0.35m、深さ0.1m	北西から南東に走る	
S D10	幅0.3m、深さ0.1m	北東から南西に走る・S D03に続く溝	

表1 第1遺構面検出 溝一覧



fig. 365 第1遺構面(中世)全景



fig. 366 第1遺構面



fig. 367 第1遺構面



fig. 368 SX01

S X06 長さ9.1m、幅5.0m、深さ1.60mを測る不整形の遺構である。大半が調査区外に延びているものと考えられる。掘鉢状に落ち込んでおり、最下層の埋土が砂であることから、水に関連する施設であるとみられる。隣接するS E01の上半部（掘形上面より約1m下）の壁より、竹（導水管）がS X06に延びており水が流れるように僅かにS X06にむけて勾配が取られていることから、S E01から水が引かれていた可能性がある。(fig.370)

この遺構の南の斜面には杭が土手に沿って打ち込まれており、藁状の植物で編まれたものが杭の周辺部に敷かれていた。護岸状の施設とも考えられるが、詳細は不明である。

上半部は、ブロック状のシルト層で埋没しており、人為的に埋められた可能性がある。人為的に埋められたと考えられる層の直前の層より、まとまって遺物が出土している。

埋土からは、土師器皿、須恵器鉢、瓦器碗、青瓷碗等が出土しており、これらの遺物から14世紀後半の時期が想定される。また、S E01とは同時存在であったとみられる。

S X07 長さ5.5m以上、深さ1.0m以上を測る不整形の遺構である。掘鉢状に落ち込んでおり、この遺構の最初の埋土が砂であることから、水に関連する施設であるとみられる。

上半部は、ブロック状のシルト層で埋没しており、人為的に埋められた可能性がある。出土遺物としては、土師器皿、瓦器碗等が出土しており、これらの遺物から時期としては14世紀後半の時期が想定される。



fig. 369 SX06



fig. 370 SX06 と SE01 間の竹製導水管



fig. 371 SX06 荘状植物遺物出土状況



fig. 372 SX06 坑検出状況

S E01 挖形は上端径約2.7m、下端径約1.2m、深さ約2mの円形で、断面は逆台形状を呈す。掘形底面に10~20cm大の亜角礫を平坦にしながら円形に敷き詰め底面を形成している。井戸下半はこの敷石上に木製の井筒が存在する。井筒の西半は抉り抜き隅丸桶状品の約4分の3を使用し、転用設置している。東半は径約1.2m、高さ約1mの自然木を抉り抜いた材（製品か）の約3分の1を使用し合体させ、ほぼ円形になるように設置している。西半の転用材は長さ50~60cm、高さ50cm、厚さ5cmで対辺上半部に約8cm大の抉穴があり、井筒転用に際し、抉穴を石と板材で閉塞している状態が認められた。石組みは井筒上端から上半部にかけて30cm大の角礫を約10段、約1.2m積み上げている。

井戸枠内部から曲物破片、底面直近から人形1（木釘が貫通するfig.374-1）、木札1（上部に切り込みをもつ）、墨書き木札1（「□□□急々如律□」fig.374-2）が、敷石下から須賀土器片などの遺物が出土している。時期は14世紀代と思われる。

S E02 挖形は上端径約1.5m、下端径約1.2m、深さ約1.1mの円形で、石組みは底面から角礫を約10段、ほぼ垂直に積み上げている。時期はS E01と同じ頃と思われる。

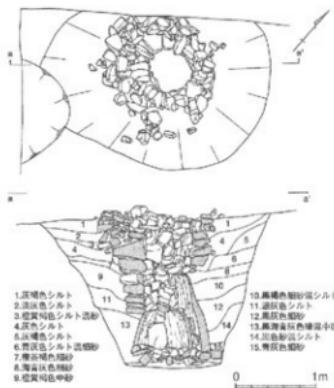


fig. 373 SE01 平面図・断面図

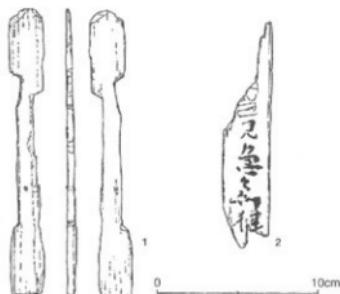


fig. 374 井戸 SE01 出土 人形・木札実測図



fig. 375 井戸 SE01



fig. 376 井戸 SE02

弥生時代の遺構面 弥生時代の遺構面は、古墳時代前期の河道2条に削平され、鳥居に残った部分である。

第1遺構面 粗砂や、砂礫を堆積層としており、中世の遺構検出面のベースとなる。出土遺物は、V

河道 様式の土器のほかに、庄内式土器や布留式土器も僅かではあるが出土している。

S K11 長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.25mの不整形な土坑である。内部には、胴部下端を穿孔した庄内並行期の壺が埋納されていた。口縁部には、高杯の坏部を打ち欠いたものを蓋として使用していた。恐らく何らかのものを埋納するためのものとみられる。

S D11 ほぼ南北に走る幅2.0m、深さ0.73mの断面浅いV字形の溝で環濠集落の溝に類似している。時期は、弥生土器編年におけるV様式後半の時期と考えられる。

第2遺構面 弥生IV様式の遺物包含層の下面で検出した。土坑1基と溝5条を検出した。SK21は、河道に削平され、詳細は不明である。検出された溝については下記の表のとおりである。

遺構名	規模(m)	検出状況(方向・切り合い関係)	時期
SD13	幅1.5m以上、深さ0.65m	河道に切られ、SD15を切る	IV様式
SD14	幅0.3m、深さ0.07m	北西から南東に走る	IV様式
SD15	幅1.6m、深さ0.35m	東西に走る埋土より滲水状況にあったと考えられる	IV様式
SD19	幅1.0m、深さ0.3m	南北に走る	IV様式
SD22	幅1.0m、深さ0.3m	南北に走る	IV様式

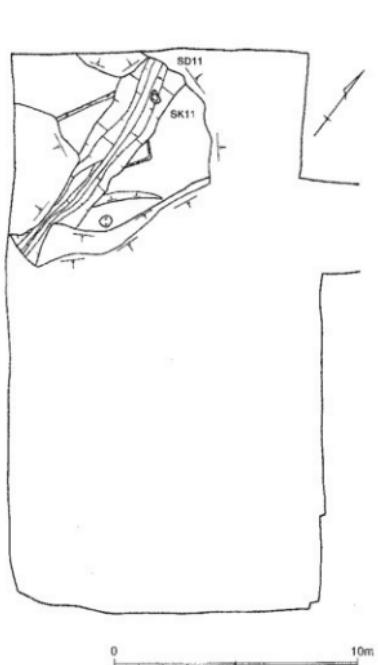


fig. 377 弥生時代第1遺構面 平面図

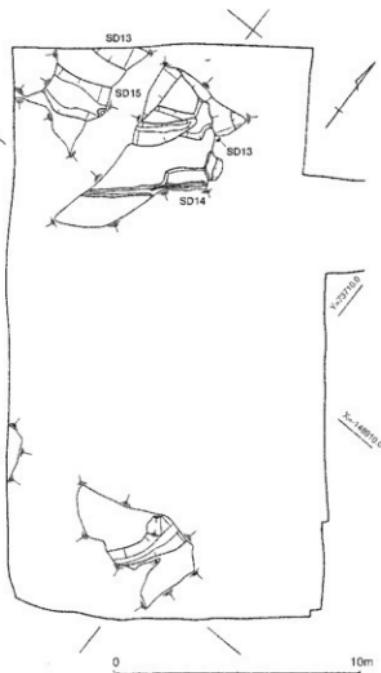


fig. 378 弥生時代第2遺構面 平面図

第3造構面 弥生Ⅲ様式の遺物包含層下で検出した。溝SD16は、幅0.6m、深さ0.11mで、溝底から浮いた状態でⅢ様式の広口壺等が出土している。幅1.0m、深さ0.13mの溝SD20は出土遺物から、Ⅲ様式と考えられる。土坑は、下記の表のとおりである。

遺構名	規 模	形 状	検出状況(方向・切り合ひ関係)	時 期
SK13	直径1.5m、深さ0.52m	円 形	断面横鉢状、壺・甌の破片が出土	Ⅲ様式
SK22	長さ1.9m、幅1.7m、深さ0.52m	不整形	底から浮いた状態で多量の土器片出土	Ⅲ様式
SK23	幅0.5m、深さ0.2m		河道に切られ形状は不明	—
SK40	長さ1.9m、幅0.71m、深さ0.11m	不整形	大半が調査区外にあり詳細不明	Ⅲ様式

第4造構面 弥生Ⅱ様式の遺物包含層下面で検出した。検出遺構の概要は下記の表のとおりである。

遺構名	規 模	形 状	検出状況(方向・切り合ひ関係)	時 期
SK26	直徑1.5m、深さ0.52m	方 形	浅い落ち込み、SK28を切る	I 様式
SK27	長さ1.9m、幅1.7m、深さ0.52m	不 明	浅い落ち込み、SK28に切られる	I 様式
SK28	幅0.5m、深さ0.2m	不定形	SK26に切られ、SK27~30を切る	I 様式
SK29	長さ1.9m、幅0.71m、深さ0.11m	長方形	浅い落ち込み、SK28に切られる	I 様式
SK30	長さ0.7m、深さ0.1m	不 明	浅い落ち込み、SK28に切られる	I 様式
SK31	直徑1.0m、深さ0.35m	円 形	断面横鉢状、SK30に切られる	I 様式
SK36	長さ0.95m、幅0.8m、深さ0.3m		SK37を切る	I 様式
SK37	長さ2.4m、幅1.5m、深さ0.13m		上器片が散乱状態で出土	I 様式
SK38	長さ1.85m、幅1.95m、深さ0.25m			I 様式
SK39	長さ1.1m、幅1.6m、深さ0.61m			I 様式
SK41	長さ1.5m、幅0.8m、深さ0.22m			I 様式
SK42	長さ0.7m、幅0.4m、深さ0.22m			I 様式
SK08	長さ5.0m、幅2.5m、深さ0.6m	溝 状	底より浮いた状態で土器が出土	II 様式

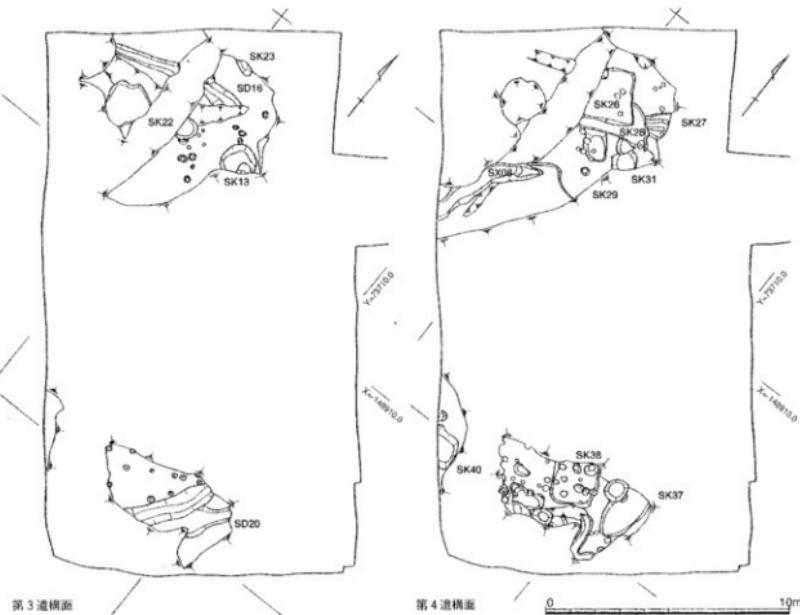


fig. 379 弥生時代第3・第4造構面 平面図

第5遺構面 第5遺構面は、本来第4遺構面で同時に検出される遺構であるが、切り合い等によって事前に検出できなかった遺構を検出したものである。

検出された土坑の概要は、以下の表のとおりである。

遺構名	規 模	検 出 状 況	時 期
S K33	長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.11m	浅い落ち込み状の土坑	I様式
S K34	長さ0.8m、幅1.0m、深さ0.1m	浅い落ち込み、S D17を切る	I様式
S K35	長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.02m	浅い落ち込み状の土坑	—
S K44	長さ0.8m、幅0.8m、深さ0.12m	浅い落ち込み状の土坑	I様式

検出された溝の概要は、以下の表のとおりである。

遺構名	規 模	検 出 状 況	時 期
S D17	幅1.0m、深さ0.11m	東西に走る溝	I様式
S D18	幅0.15m、深さ0.2m	東西に走る溝	I様式

3.まとめ 遺構は豊富に検出できたが、その示す意味については、様々な制約により、不明な点を多く残す結果となった。その中で、あえて述べれば、中世の段階では、ピットの埋土は、灰白色シルトと灰色シルト・暗灰色シルトの3種類であり、それぞれが切り合い関係にある。このことから、すくなくとも中世の遺構面には3時期は存在していたと考えられる。時期としては、14世紀から15世紀前半の時期が考えられ、この時間帯のなかで、建物群は変化していくものとみられ、最後には当調査地は、15世紀後半には耕作地へ変化し、居住区から生産地へと変化を遂げたものとみられる。

弥生時代の遺構としては、S D11があげられる。時期としては庄内段階には廃絶していたと考えられるが、その形状は、環濠集落の溝に類するものであり、戎町遺跡が拠点集落の一つと目されているだけに、周辺の調査の進捗が待たれるところである。当該地が集落の縁辺部であるとするならば、周辺の近くに墓域の存在が想定されるが、それにあたる位置は、不明と言わざるを得ない。しかし、S K11の存在から、庄内期には、この地にも若干埋葬のような行為が行われていたようであり、集落にもその範囲等に変化が起こっていた可能性もある。

前期段階から縄々と土器や遺構が存在しており、当該地での営みは継続して行われていたものと考えられる。このことから、今回の調査区は、戎町遺跡の縁辺部とは考えがたい状況にあり、もう少し遺跡が南西方向に延びる可能性が十分にあるものと考えられる。

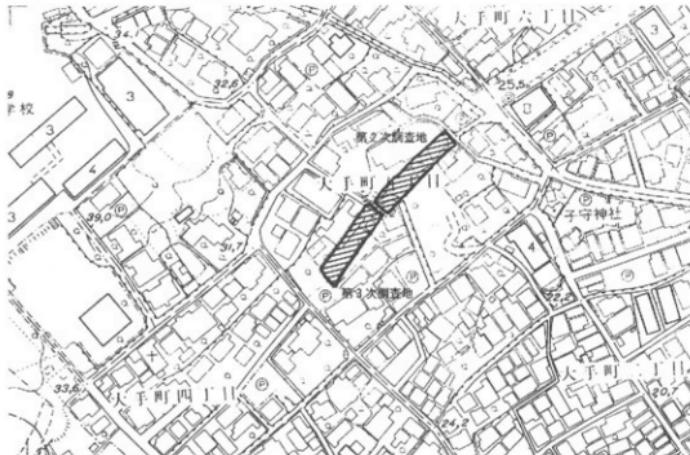
おおてちょう 48. 大手町遺跡 第2・4次調査

1. はじめに

大手町遺跡は神戸市須磨区大手町周辺にひろがる遺跡で、妙法寺川右岸の丘陵上に位置する。調査地の標高は28~29mである。調査地の東は比高2mほどの段丘崖となり一段下がり、この崖に沿って妙法寺川の支流である東細沢谷川が流れる。さらに東約350mには妙法寺川が存在する。

調査地の北西には勝福寺があり、丘陵部および平野部を見晴らす。この寺は觀応擾乱の際、足利直義方に破れ、尊氏方が籠もった松岡城であるという説がある。大手という地名はこの地が城の正面であることによるといわれる。

この遺跡は、都市計画道路山麓線の敷設にともない平成7年6月29日に行われた試掘調査によって、はじめてその存在が知られるようになった遺跡で、平成7年8月に第1次調査が行われた。約210m²を調査した結果、遺構面が浅く、近世~現代の擾乱によって遺跡の遺存状況が悪かったものの、縄文時代晚期の上器片を出土した土坑、弥生時代中期および後期の土器・石鎚、平安時代の土坑・柱穴などが確認されている。



2. 調査の概要

今回の第2次・第4次調査は、都市計画道路山麓線の建設設計画部分のうち約1350m²についてこれを行った。調査地の現状は宅地、調査地なかもどで未調査範囲となっている生活道路をはさんで、北は旧大手庄村屋、窪井家の屋敷地（第2次調査地）、南はこれも旧大手庄村屋、兼吉家の屋敷地（第4次調査地）である。

調査の結果、第2次調査区の東部で近世の遺物包含層および遺構・中世の洪水砂層、中部から西部で弥生時代から現代の遺物包含層および遺構、縄文時代の遺物包含層が確認された。第4次調査区では遺物包含層はほとんど残っていなかったが、弥生時代・近世の遺構が確認された。以下主な遺構について略述する。

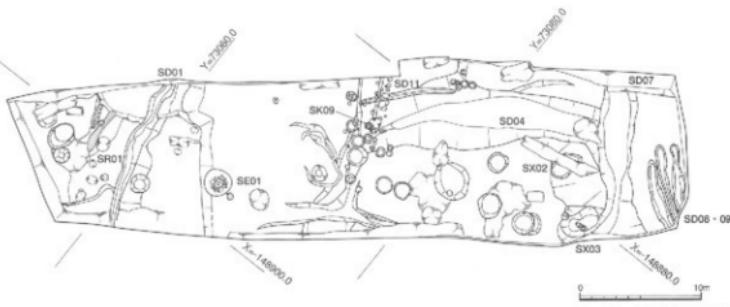


fig. 381 第2次調査地遺構平面図

第1遺構面

丘陵上に位置するため、地面から遺物包含層・第1遺構面まではごく浅く、表土層を除去するとすぐに遺構面となる部分がほとんどであった。ただし、調査区の東端部は遺跡の基盤層が急激に下り、崖となる。この東に洪水砂が厚く堆積している（現状の地表から4.5m以上の深さがあることを確認した）。この洪水砂中深さ3.7mの部分で15世紀の青磁（fig. 393-23）が出土しており、室町時代以前はこの地点で東西にかなりの段差のあったことが判明した。その後江戸時代に至ってもこの崖は約1mほどの段となって残る。さらにこの江戸時代の遺構面も洪水砂で覆われており、数次にわたる洪水によって本来の崖面の東に砂が堆積し、その結果、現状にまで崖が東へ移動したことが確認された。その他の部分は丘陵上にあたるため土砂の堆積が少なく、表土の腐食土層を除去すると弥生時代中期～近代の遺構が同一面で検出される。



fig. 382 調査区西半 全景



fig. 383 調査区東半 全景

- S D07 東部の崖下部分、15世紀以降の洪水砂の上面の江戸時代の遺構面にある溝である。崖部分に沿って北西—南東方向にのび、江戸時代の肥前陶磁器・焼烙などが大量に投棄されている。また崖上から黄色い焼土塊が投げ込まれたような状況を確認した（S X02）。
- S D08~09 S D07に並行するような方向の溝である。江戸時代の肥前陶磁器等が投棄されている。
- S E01 掘形の平面プラン円形の石組みの井戸である。径約1.8m、遺構検出面からの深さ約1.5mをはかる。石組みの内径約70cm。深さは約80cmをはかり、内面のつらで4段程度石が積まれる。井戸内および裏込めから江戸時代の瓦・陶磁器類が出土している。
- S K09
(水琴窟) 掘形の平面プランが 70×54 cmの不整楕円を呈する水琴窟である。この遺構の築造過程は以下のとおりに復元される。遺構検出面からの深さ約80cmの掘形を掘削、底面を整えた後、一辺15cm程度に割った瓦を2枚重ねて置く。底の中央を一辺約3.5cmの隅円方形に打ち抜いた丹波焼の壺をこの瓦の上に伏せる。掘形底面、壺の周囲を比較的大ぶりの礫で固め、さらに掘形内に礫を充填する。排水施設はない。

水琴窟の周囲には西方から水琴窟に向かう飛び石の抜き跡7ヶ所、水琴窟の南にオリーブ灰色の粘土を張った部分1ヶ所が確認されている。さらに北東約3mには瓢箪池跡があり、これらが庄屋窪井家の庭園の一部を構成していたものと思われる。



fig. 384 水琴窟 SK09 周辺

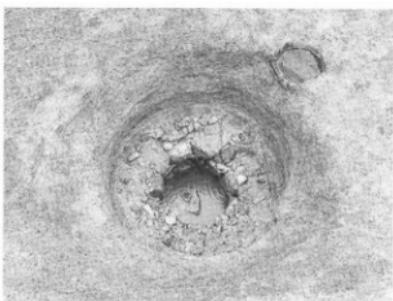


fig. 385 井戸 SE01

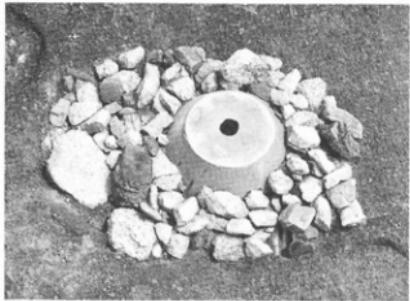


fig. 386 水琴窟 SK09



fig. 387 水琴窟 SK09 断ち割り状況

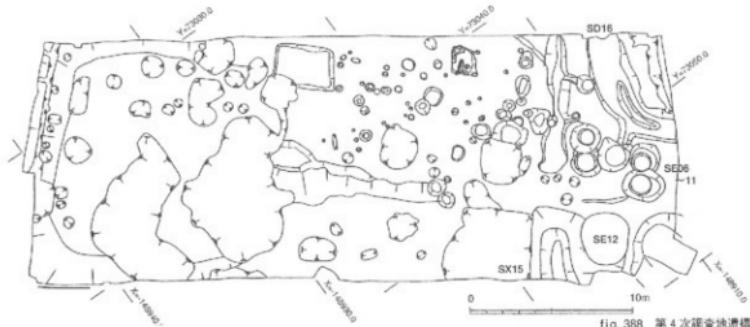


fig. 388 第4次調査地遺構平面図

- S D16 近世の炊事場に関連する排水施設と考えられる遺構である。溝の幅2m程度、深さ約40cmをはかる。溝底の石敷きは1.5m幅で2m強の範囲にある。一部に粘土が敷かれる。溝の左岸には約2mの範囲で人頭大の石が2段程度、30cmの高さで積まれる。
- S E06～S E11 S E12の西にあたる部分に集中する井戸群である。何重にも切りあっており、たびたび井戸の掘りなおしが行われたことが知られる。すべて素掘りのもので、井戸枠の内法は約1.2mの平面円形、掘形は径約2mの平面不整円形を呈する。深さは約90cmである。
- S X15 石敷きおよび石垣をもつ園池遺構である。池の主要部分は調査区の東場外にあり、調査地で確認できたのは西の山側から池部分に流下する滝口部分と池西側の敷石部分である。この敷石部分はすり鉢状にへこむ部分があり、この部分の敷石を除去すると、そのと下層から石組みの井戸（S E12）が検出された。この池は洪水砂によって埋没しており、池の石垣の裏ごめからは江戸時代初期の陶磁器類が出土している。このことから池は江戸時代前期以降につくられ、天保年間までに洪水によって埋没したものであることが判明した。
- S X03 約3m×約2m、深さ約1.5mをはかる土坑である。覆土上位でかわらけ・瓦・羽釜・碟・骨などの破片が面的に出土した。出土遺物は室町時代のものである。
- S D11 幅約50cmの溝である。約8mが検出された。S D04と切り合い関係にあるが、覆土は全く同じで前後関係は不明。飛鳥時代の杯1点が出土している。



fig. 389 園地遺構 SX15



fig. 390 土坑 SX03 遺物出土状況

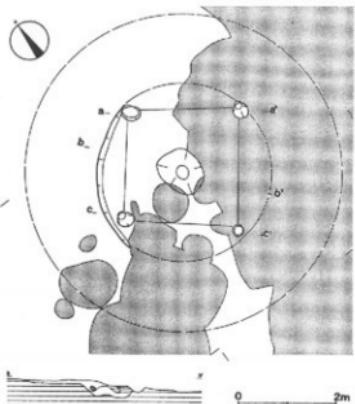


fig. 391 整穴住居 SB01 平面図



fig. 392 積穴住居 SB01

SB01

平面プラン円形の堅穴式住居。南半はSD17等によって破壊され、遺構確認面から床面までの深さも約5cmと遺存状態は良くない。中央土坑1と柱穴4が確認された。検出プランでは径4.0mの住居址となるが、柱穴の位置が外に寄りすぎている。本来はベッド状遺構をもつ徑6m程度の平面プラン円形の住居であったと思われる。

柱穴は平面円形のもので径は20~30cm、柱穴間の距離は2.3m~2.4m前後がある。住居址の中央には平面不整円形、径約1m、床面からの深さ35cmをはかる中央土坑がある。出土遺物は弥生時代後期のもので、床面に密着して甕、中央土坑から砾、甕・鉢等が出土した。

SD01

SR01の埋没後、その上をほぼ同じ方向で流下する幅約1.5m、遺構検出面からの深さ約80cmの溝状遺構。覆土は洪水砂層が主体で、SR01と同一時期、弥生時代中期中葉の土器・石器が含まれる。土器類はほとんど磨滅していない。

SD04

「く」字形に屈曲する溝。底面のレベルは屈曲部を中心南と北東の2方向に下がる。南へは、幅約2~3mの比較的浅い溝となり、北東へは幅6m以上と広がり、深さも約60cmと深くなる。さらにこの溝は崖面に至り急激な角度で落ちる。この部分は15世紀以降の洪水砂で埋没する。

弥生時代中期~後期の遺物がこの遺構の底面に密着して出土する。また底面から約10cm上で飛鳥時代の須恵器数個体が広い範囲にわたってばらけた状態で出土している。覆土は真っ黒に土壤化した分層しづらいシルト質砂であるが、溝を再掘削したような痕跡は認められない。したがってこの遺構はかなりの期間開放された状態であったようである。平安時代・鎌倉時代の土器が若干出土していることから、この頃以降最終的に埋没したのものと考えられる。

SR01

幅約7m、遺構検出面からの深さ約1.1mを測る北から南に流下する自然流路である。覆土は洪水砂層が主体で、弥生時代中期中葉の土器・石器が多く含まれる。土器類はほとんど磨滅していない。

第2遺構面 第2次調査地点の東部崖上、5a層において縄文時代早期の土器、サヌカイト剥片等が出土している（S X04）。

3.まとめ これまでの4次にわたる発掘調査によって、大手町遺跡の様相が徐々に明らかになってきた。これを時代ごとに表示すると、以下の表1のとおりである。

前述のとおり、遺跡の遺存状況の悪いなかで、この遺跡は縄文時代から近代にわたる各時代の人々の営みの痕跡が遺跡として残されている。

大手町遺跡の立地する丘陵から望める沖積地には、弥生時代以降の拠点集落となる戎町遺跡があり、背後の山頂・山腹には多くの占墳が存在する。当遺跡は、戎町の集落の枝村である可能性が想定される。

このほか、古代・中世の遺構・遺物も確認されており、とりわけ、平安時代後期の須恵器、室町時代の瓦・かわらけなどが出土していることは、大手という地名の元になったとされる松岡城にかかる遺構・遺物が今後確認される可能性を示し、これから発掘調査の進展が期待される。

時代	出土遺物	検出遺構
縄文時代前期	押型文土器・サヌカイト製石器	遺物包含層
縄文時代晚期	突帯文土器	土坑
弥生時代中期中葉	土器・サヌカイト製石器・太型鉈刃石斧	自然流路・溝
弥生時代中期後葉	土器	溝（2次S D04、完全に埋没するのは平安時代後期）
弥生時代後期	土器	溝・土坑・竪穴住居
古墳時代後期	須恵器	溝
飛鳥時代	須恵器	溝
平安時代前期	黒色土器・土師器	溝
平安時代後期	須恵器	溝
室町時代	土師器・須恵器・瓦・骨	土坑
江戸時代	肥前陶磁器・煙管・寛永通宝・炮烙・かわらけ・砾石・金屑・輪羽山・瓦・丹波焼壺他	屋敷地（圍池・井戸・土坑・水琴窟・溝他）
近現代	焼成弾他	現層敷

表1 大手町遺跡（1～4次調査）出土遺物・検出遺構

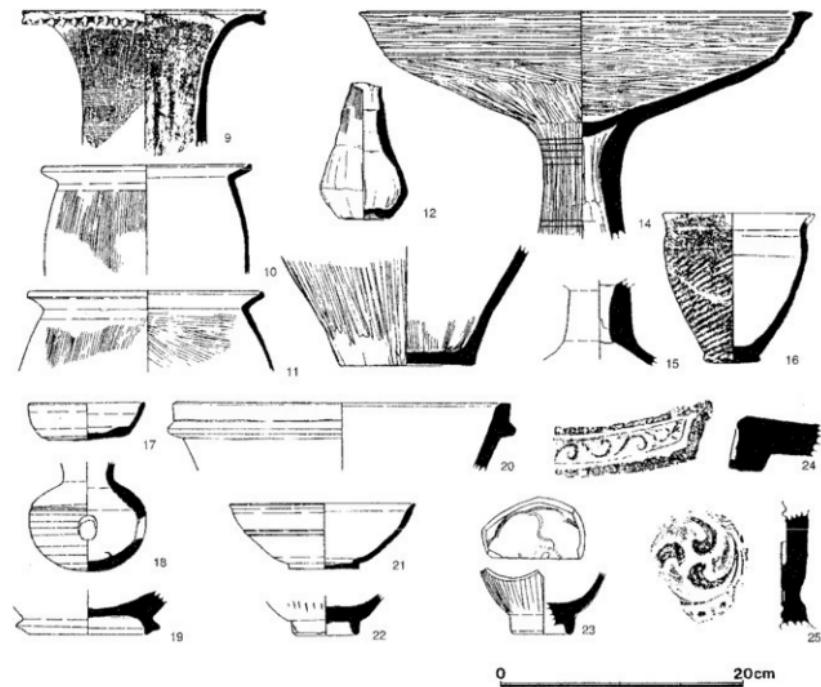
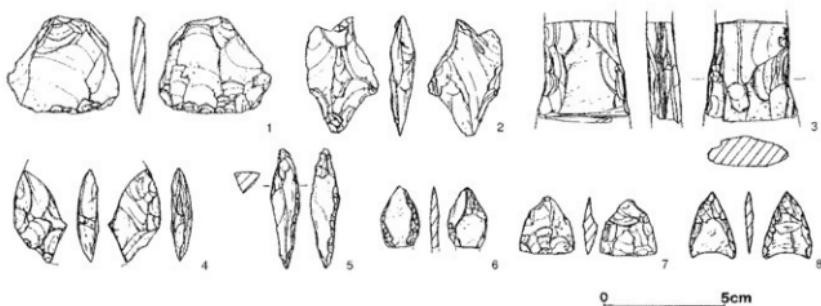


fig. 393 出土遺物実測図 (1)

1・2・5a層 (SX04) 3・4・23:2層 5・7:SD01 6・9~13:SR01
 15:SD04 16:SB01 17:SD11 18:SD03 19:SX02 20・21:1層
 22:SD07 24:SX03 25:SX16

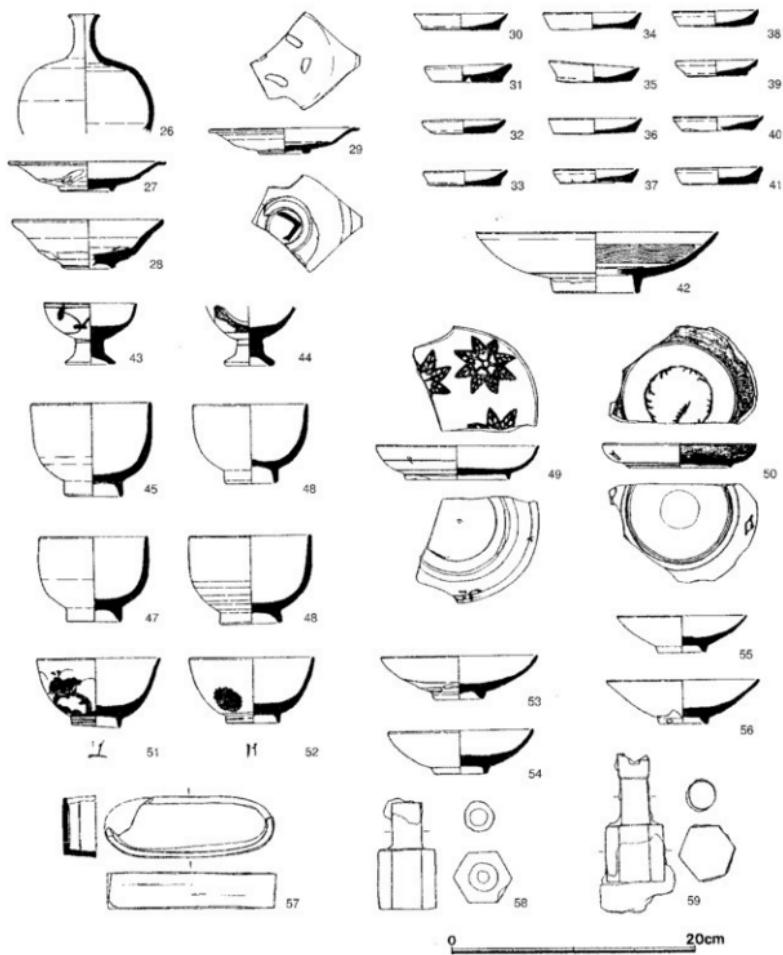


Fig. 394 出土遺物實測圖(2)
 26: SX16 27·28·30~48·51·56: SD07 49·50·57·58: 1層
 26: 僧前燒 27~29: 廉津燒 30~41: 土師器燈明皿
 43~54: 肥前陶磁 57: 醫水入 58·59: 燈夷彈

たるみ ひゅうが 49. 垂水・日向遺跡 第15次調査

1. はじめに

垂水日向遺跡の発掘調査は市街地再開発事業に伴い、昭和63年に開始され、これまでの調査で、縄文時代～鎌倉時代の遺構、遺物が発見された。また、調査の進展と共に、各時代の遺構の面的な分布状況を把握し得るようになってきた。

今回の第15次調査地は、第11次調査地に隣接しており、西からA, B, C区とする3カ所の調査を実施した。



fig. 395
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要 平安～鎌倉時代

調査区北西端で溝が1条確認された。長さ約5.5m、幅30～40cm、深さ10cm程度で、北東南西方向に流れる。出土遺物は少ない。この付近から北西方向に地形傾斜が上がる。

この時期の遺構面は北西端を除いて、湿地あるいは、耕作地（水田）となっており数枚に分層可能であるが、いずれも明確な遺構（水田畔、水路）は確認できなかった。

出土遺物は平安時代前期～末期（9～12世紀）のものが多く、主に調査区北西部を中心に出土した。

道路を隔てた北西側の4次調査区（平成2年度調査）では、12世紀代の掘立柱建物群が確認されており、SD101はそれらの建物群とその南東部に広がる湿地（水田）を画する溝の可能性がある。



fig. 396 中世の遺構面 (B区)

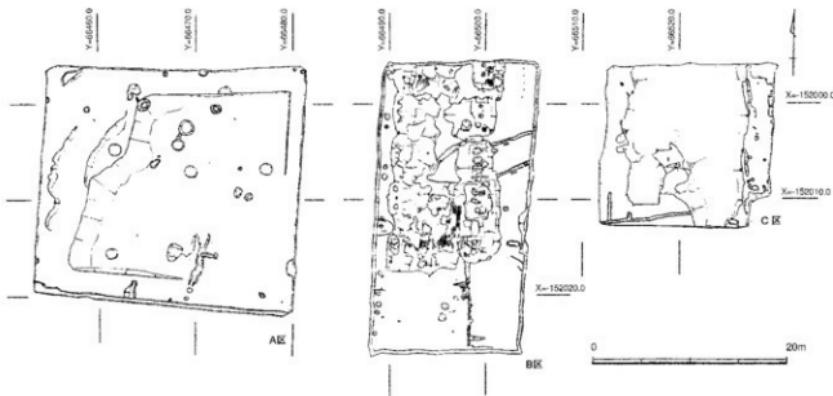


fig. 397 中世遺構面平面図

- B 区** 当調査区においては、古墳時代～中世の遺構面が建物基礎などの地下構造物によって調査区の約2/3の面積が、破壊されている。平安時代～鎌倉時代の残存した遺構面からは、溝3条、土坑1基を検出した。
- S D101 長さ約4.3m、幅30cm、深さ10cm程で、北東～南西方向に流れる。
- S D102 長さ約3.3m、幅30cm、深さ10cm程で、S D101と平行して北東～南西方向に流れる浅い溝である。S D101, 102は褐色シルトの面で検出されている。
- S D103 調査区北西部で確認された溝で、長さ約3.6m、幅50cm、深さ5cm程で弧状を呈する。なお、この溝は黄褐色シルトの面で検出されている。
- S K101 調査区西端で確認された穴（土坑）で、 1.6×1.5 cm、深さ10cmを測る。いずれの遺構も、出土遺物は少ないと。
- C 区** 現地表下約30cmで中世の水田耕作土が現れる。この土層約20cmを掘り下げるとき、平安時代の遺構面になる。この遺構面は第5次・10次調査で確認されており、遺構の埋土が灰色系を呈する。
- この調査区においては、後世の擾乱により大半の遺構面を失っており、ピットが3基検出されただけであった。
- 古墳時代 調査区北東～南西方向に褐色系シルトが流路状に堆積し、古墳時代前期～後期の遺物を若干含んでいる。当該時期は低湿地であったと判断される。
- A 区** 長さ約6.6m、幅30cm、深さ10cm程で、北東～南西方向に流れる。S D101, 102を検出した褐色シルトを除去した黄褐色シルトの面で発見され、一部上記遺構と重複する部分もある。堆積土は茶褐色シルトである。なお、この遺構はS D103と堆積土の状況が酷似しており、S D103も古墳時代の遺構の可能性がある。
- C 区** 平安～鎌倉時代の遺構面下5～10cmで第2の遺構面に達する。この遺構面では、溝を確認したが、方向的一貫性がない。出土土器から、古墳時代前期の遺構と考えられる。

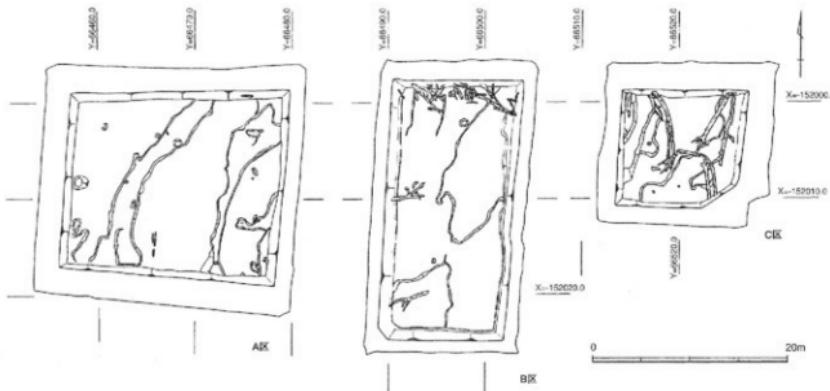


fig. 398 縄文時代の濁横面平面図

縄文時代 洪水砂層

古墳時代の土器を含む褐色系シルトの下層には、遺物を含まない黄褐色系シルト（弥生時代頃の堆積層）が約1mの厚さで堆積する。その下層は、東半分では、縄文時代後期の土器を含む洪水砂層が1~1.5m堆積しているが、西半分は急激に薄くなり、西端では、全く堆積していない。また、これまでの調査で大量に出土し、また今回のB・C区では確認された流木群がごくわずかしか発見されなかった。これらから、福田川寄りの1次調査地から西に連続する縄文時代後期の大洪水の北端が当調査区で確認されることになる。

漣痕

洪水砂層を除去すると鬼界アカホヤ火山灰の堆積層が検出される。火山灰層は北東～南西方向に流れた洪水砂層によって一部を削り取られるものの、保存状態は良好であり、火山灰の堆積層上ではこれまでの調査で確認されている漣痕（ripple mark）が検出された。漣痕は、20~22条/1m（上層）、25~27条/1m（下層）、方位はN10°~15°Wまたは、N22°~26°Wで、南東～北西方向の波によって形成されたものである。

漣痕の方向から、この付近は弧状の小さな内湾で、潮汐の影響を大きく受ける浅い海であったと考えられる。

また、漣痕は2層確認できる部分がある。その形成は潮の満ち引き（約6時間毎）で成立し、2回の形成が認められるところから、火山灰は、漣痕を形成する時間がないくらいに急激に5cmほど降り積もり、その後12時間位で若干の降灰があったことが判る。



fig. 399 A区 漣痕検出状況



fig. 400 A区 繩文時代 河道



fig. 401 A区 汀線検出状況

汀 線

北西部では、火山灰の堆積していない部分が北東～南西方向に連なり、その直近の西側に直径2mm～1cm程度の軽石が集中して出土する部分が確認された。火山灰の切れ目は当時の汀線（海岸線）であり、軽石は波打ち際に打ち上げられたものであることが明らかとなった。この当時（約6300年前）は、海水準が現在の水準よりも約2m高く、「縄文海進」と呼ばれている。この海進時の海岸線を検出した例は、世界的にも珍しいという。

なお、軽石の供給源は不明であり、鬼界アカホヤ火山灰との関係は現在のところ明らかではない。

汀線と漣痕の

移築保存

なお、当区では汀線と軽石の漂着状況の明らかな部分1ヵ所と漣痕が明瞭に残る部分を2ヵ所切り取り移築保存を行った。

ヒトの足跡

アカホヤ火山灰層の下層は、青灰色～青灰褐色シルト、極細砂が堆積し、当時は干渴の状態であった。これらの層では、従来の調査で、ヒト、その他の動物の足跡を検出している。T.P.1.6m前後のレベルでそれらの足跡の検出を試みたが、足跡は連続性を持って検出されなかった。また、これより下の調査については、上留め杭、支保工の耐久強度等の安全面を考慮して、調査区の東半部に幅約1.5mのT字型のトレーナーを設定し、T.P.0.45m付近で確認作業を行ったが明瞭な足跡は発見できなかった。

B 区

洪水砂層

黄褐色シルトを除去すると厚さ約1～1.5mの砂礫層があり、大量の樹木と若干の縄文土器（後期の土器が多い）を含んでいる。

自然木は、北半部に集中して出土した。幹、枝材が多いが、根材も若干出土している。砂礫は北東～南西方向の水流によって堆積したことが土層断面の観察により明らかである。

火山灰層

A区で明瞭に確認された鬼界アカホヤ火山灰の堆積層は、当調査区では、洪水砂層に削られており、北西部で2mほどしか残存していなかった。また漣痕は検出されたが、単位は測定できなかった。



fig. 402 B区 洪水砂層 樹木出土状況



fig. 403 B区 縄文人の足跡

ヒトの足跡 洪水による砂礫層の下には、青灰色～青灰褐色シルト、極細砂が堆積し、当時は海岸近くの干涸の状態であった。他の地区と同様にこれらの層から、T.P.1.7mあたりで、ヒトの足跡を検出した。足跡は調査区ほぼ全域に広がっているが、数カ所で、歩行の状態が明らかな部分がある。足跡の大きさは長さ20～25cmと10～15cm程度の二種類があり、これまでの調査で確認されたように大人と子供の足跡である可能性は高い。なお、北半部の歩行の方向が明らかな1×4m分の足跡をはぎ取り保存した。

これより以下の調査については、掘削深度の関係上、安全を期するため、他の地区と同様にトレーンチ調査を実施し、T.P.0.6m付近で足跡の検出を行ったが確認できなかった。

C 区

洪水砂層

これまでの調査で、この洪水砂層では平均1.5m程度の堆積が認められたが、11次調査では南半で50cm～1.5m、北半では1m以下の堆積であった。また、洪水層からこれまでの調査と同様、大量の樹木が出土した。

調査区中央付近で確認した樹木は、幹の直径66cm、長さ310cm以上あり、その場で倒れた状態で出土している。この木の根は、下の層位を貫いており、現地で生えていたものが洪水で押し倒されたと判断される。

洪水砂層から出土した縄文土器は、中・後期に属するもので、約50点出土している。大部分は磨滅がなく大型の破片も含まれることから、遠方からというよりも、この調査区の近辺から流されて堆積したと考えられる。

漣痕

調査区西端では、洪水砂層によって削り残される状態で、アカホヤ火山灰層（約6300年前に爆発した海底火山の降灰層）の堆積が一部残存し、これまでの調査でも確認されている漣痕（ripple mark）が検出された。漣痕は、これまでに検出したものと同様のもので、24～26条／1mで南北方向の波によって形成されている。方位はN26°～31°Wである。

第7次調査で検出した漣痕はほぼ北を指し、第8次調査北地区で検出したものはN30°Eである。原則として、波は岸に平行に打ち寄せることから、当遺跡付近は縄文時代前期頃には、小さな弧を描く入江であったと考えることができる。



fig. 404
C区洪水砂層樹木出土状況
(洪水で押し倒された樹木)

ヒトの足跡 アカホヤ火山灰層の下層には、青灰色～青灰褐色シルト、極細砂が堆積し、当時は海岸近くの干潟の状態であった。これらの層では、T.P.1.6mあたりで、ヒトの足跡を検出した。しかし、検出したものは僅かで、歩行の方向等は特定できていない。

これより下層については掘削深度の関係上、トレーニング調査を実施した。調査の結果、T.P.0.6～0.4mあたりで、これまでの調査同様、ヒトの足跡と偶蹄類（シカ？）の足跡を検出した。しかし、トレーニング調査のために歩行の方向等は把握できなかった。

3.まとめ
古墳～鎌倉時代 今回の調査では、平安時代末～鎌倉時代の遺構は少なかった。いずれの調査地区も、微高地から湿地に変わる場所であり、建物群の縁辺部にある。当時は空閑地または、耕作地であったと推定される。また、古墳時代も同様の状態であったと判断される。

繩文時代 繩文時代の洪水砂層がA区西半分では急激に薄くなり、西端では、全く堆積していないことが判明した。また、B・C区では大量に確認された流木群がA区ではごくわずかしか発見されなかった。このことから、福田川寄りの第1次調査地から西に連続する繩文時代後期の大洪水の北西端が当調査区で初めて確認されることになる。

鬼界アカホヤ火山灰の堆積層は、A区の遺存状況が良好であった。検出された蓮痕の方向から、当時の地形が弧を描く小さな内湾であったことが推測できるようになってきた。また、A区で鬼界アカホヤ火山灰が降った時期の汀線が確認された。この当時（約6300年前）は、海水準が現在よりも約2m高く、「繩文海進」と呼ばれている。この海進時の海岸線を検出した例は世界的に珍しいということである。なお垂水付近では、最大でT.P.2.4m付近まで海水準が上昇していたことが今回の調査で確認された。

鬼界アカホヤ火山灰の下層は、青灰色～青灰褐色シルト、極細砂が堆積し、当時は海岸近くの干潟の状態であった。A～C各区でヒトの足跡を検出したが、特にB区では調査区ほぼ全域に広がって確認され、数カ所では、歩行の状態が明らかな部分がある。足跡の大きさは長さ20～25cmと10～15cm程度の二種類があり、これまでの調査で確認されたように大人と子供の足跡である可能性が高いことが判明した。

ふたつや 50. 二ツ屋遺跡 第4次調査

1. はじめに

二ツ屋遺跡は、明石川の支流である榎谷川中流域右岸に位置し、地形的には沖積地とその背後の段丘斜面に立地している。平成3年～4年の土地区画整理事業に伴う発掘調査(第1次調査)で弥生時代から中世の遺構や遺物が確認されている。とりわけ平安時代末頃の、地方貴族の邸宅と考えられる「コ」の字形に配置された建物群を確認したことは、本遺跡の歴史的評価のみにとどまらない重要な意味を持っている。

今回の調査は宅地造成に伴うもので、位置的には第1次調査地の西側の段丘斜面上にある。試掘調査によって埋蔵文化財の存在が確認されたため、造成工事時に切り土となる範囲と2m以上の盛り土が施される範囲にし、発掘調査を実施する運びとなった。調査範囲にはかなりの急斜面地があり、そこにはトレーナーを先行して設定し、その結果や隣接調査区での遺構・遺物の状況を判断して調査を進めていくこととした。調査においては、調査範囲の平面形や傾斜を考慮して1～9の調査区を設定した。

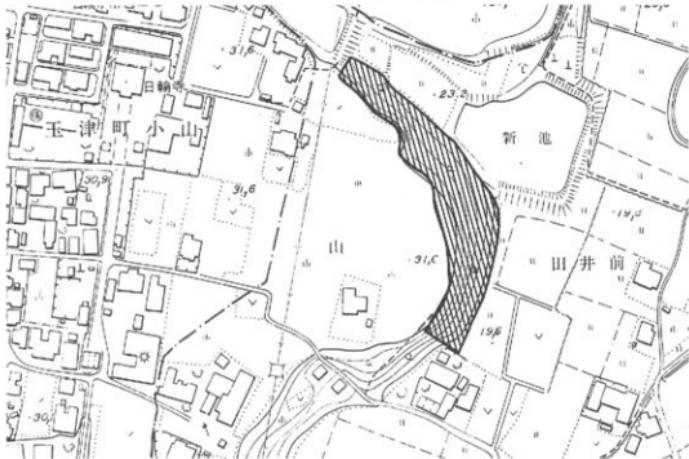


fig. 405
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

層序

各調査区によって土層の堆積状況が異なるが、大別すると以下のようになる。まず表土あるいは旧表土の混じった最近の地崩れの上が一番上にあり、その下は黄茶色系の土、暗茶色系の疊混じり土、淡灰色疊と続き、淡黄色系の粘土あるいはシルトの地山となる。暗茶色系の疊混じり土は試掘調査で確認した遺物包含層で、遺構面は地山の上面である。

検出遺構

3区で斜面方向に沿う溝を1条、4～6区で斜面方向に直行する溝を1条検出した。

S D 01

3区で検出した等高線に沿った溝で、幅0.7m、深さ0.3mである。長さは3.2mまでを確認したが、南側は調査区を越えてさらに続き、北側は傾斜変換部付近で削れてなくなっている。断面の形状は浅い「V」字形で、埋土は淡灰色砂疊である。遺物は出土しなかつたため溝の時期は不明である。